
本と勇気と演劇部

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本と勇気と演劇部

【Zコード】

N77410

【作者名】

まあ

【あらすじ】

『サドで邪悪な召喚獣』の番外編です。

理音、明久の小学校時代の友人『本宮 葵』。

彼女は小説家を目指しているが、自分に自信が持てない。

お馴染みのFクラスの面々と前田兄弟は彼女の背中を押して上へられるのでしょうか？

自サイト『悠久に舞う桜』でも完結済みです。

オリキヤラデータ

オリキヤラプロフィール

モトミヤ
本宮 葵

所属クラス 2 - B

性別 女

備考

理音、明久、瑞希と同じ小学校の卒業。理音と明久とは顔見知りだつたが、瑞希とは面識がない。

内向的な性格で、人と話す事は苦手。趣味は物語を書く事で将来の夢もあるが、自分に自信がなく、その性格のためか両親には言い出せずになっている。

友人は少なくクラスの女子からは軽く無視をされている。

理音曰わく、メガネつ娘の巨乳。その破壊力は瑞希をも上回る。

予習問題（前書き）

サドで邪悪な召喚獣番外編。第3弾です。

第1弾は更新停滞中。（爆笑）

理音と明久の過去はこの作品で部分的に書かれるかもしれません。

予習問題

「お願ひします。返してください」

空が赤く染まり始める頃、少女はノートの片隅に書いた小さな物語をクラスのいじめっ子グループに取り上げられ、今にも泣き出しそうな瞳で返して欲しいと言つが、

「こいつ、バカじゃねえの。見ろよ。白馬に乗った王子様とかずいぶんとメルヘンチックなもの書いてよ」

「こいつあれだろ。夢は小説家さんになりたいです。とか言つんだよな。こんなくそつまんな話しか書けねーのによ」

いじめっ子グループのうちの2人が少女が書いた物語を読んでバカ笑いをすると、

「夢なんて、見るなよ。そうだ。優しい僕たちが現実つてものを教えてあげるよ」

1人の少年が悪気など微塵もなさそうな笑顔で少女のノートを破こうとして、

「ダメえ！……！」

少女は大声を出してその少年からノートを取り戻そうとするが、少女の腕力では取り返す事などできず、

「あつたまた。冗談のつもりだったのに、本氣でこんなくそつま

んねえ話破つてやる

少女の反撃を喰らった少年は本氣で少女のノートを破りつとした時、
「なにやつてんだよ。女の子のノートを破りつするなんてサイテ
ーだよ……」

「アキ、面倒な事に首を突っ込むなよ。バカはあやつて自分を人
より優位な位置に持つていきたいんだから」

少し頭の悪そうな少年と一見、少女と見間違えるくらいにかわいい
少年が教室に入ってくる。

「ちょっと、リオ、一人で帰ろつとしないでよ。女の子のピンチな
んだよ」

「興味ない」

少年の1人はいじめになど興味がなさそうに欠伸をすると廊下を出
ようとするが、もう1人の少年が彼の腕をつかみ。

「こじめっこなら、多少ケガさせても問題ないって、だから、ボク
じゃなくてあこづらで実験しなよ」

「ほう……」

帰ろうとしている少年は友人の一言でニヤリと笑うと、

「お前らはいじめられる立場がわからないから、そいつをこじめる
んだな。なら、俺がいじめられるやつの立場を教えてやろう」

懐から花火を取り出し、少女をいじめていた少年達を笑顔で撃ち抜いて行く。

これがわたし、本宮葵と前田理音くん、吉井明久くんとの出会いでした。

予習問題（後書き）

どうも、作者です。

内向的な少女。本宮葵が今回の主人公です。

理音や明久の昔の友人が主人公ですが、存在感は薄い。（爆笑）

第1問

(……懐かしい夢だつたな)

葵は授業中に昨日の夢を思い出す。

(前田くんと吉井くん、元気にしてるのかな？ 前田くんは小学校卒業と同時に留学、吉井くんは文月学園にいるみたいだけど、別の中学校に進んだから、疎遠になつちやうし)

葵は幼い頃に仲良くなつた男の子2人の顔を思い浮かべて、くすりと笑うと、

「本富さん、この問題を解いてください」

「は、はいー？ ……すいません。聞いていませんでした」

その様子を見ていた教師に名指しで問題を解けと言われると、葵は慌てて立ち上がつた後、小さくなつて聞いていなかつた事実を告げる。

「……まったく、本富さん、授業をしつかりと聞いていてください。確かに今の季節、日差しが暖かいので眠くなる気持ちもわかりますが、授業に集中しないとまたFクラスに遅れを取る事になりますよ」

「どうやら、授業を上の空で聞いていたのは葵だけではなかつたようだ、教師は春の陽気に負けてはいけないと教室の生徒全員に言つた。

「本富さん、座つて良いです。それでは……」

教師は葵に向かい座れと言つた後、葵の事など氣にもかけずに授業を再開していくなか、

「本富のヤツ、何やつてんだよ。あいつが授業を聞いてなかつたら、また、Fクラスに負けたとか言われたじやねえか」

「ホントだよ。授業を真面目に受けけるくらいしか取り柄がないような地味娘なんだからそれくらいはやれよな」

「……」

葵はクラスメート達の冷たい視線に居心地の悪さを感じながら自分の席に座り、

(……)

気分を代えたいと思ったのか、机の中から一冊のノートを取り出し、真剣な表情でノートに何かを書き始める。

第2問

(……みんな帰っちゃったから、遅くなっちゃった)

葵は今日は教室の掃除当番だったため、掃除をしていたが、クラスメート達は葵に掃除を押し付け、彼女一人を残して帰ってしまった。

(……どうして、わたしはこんななんだろう?)

葵は自分の鞄を持ち、廊下に出ると言いたい事もはつきりと言つ事ができない自分の性格に嫌気がさしているようで瞳に涙がにじみ始めた時、

「ん?」

「ふえっ! ?」

葵の姿を見た1人の男子生徒が葵に興味を持ったようで葵の肩をいきなりつかみ、葵は男子生徒に肩をつかまれた事でバランスを崩して床に倒れ込む。

「……白か」

「! ?」

男子生徒は床に倒れた葵のスカートの中をしつかりと見たよつて、ぼそりとつぶやくと葵は慌ててスカートを押さえるが、男子生徒に何も言えずに顔を赤くしてうつむいてしまつ。

「り、理音、お主は何をしておるのじゃ！？　お主、大丈夫か？
ケガは？」

葵と男子生徒の様子を見ていた男子生徒の友人が葵に駆け寄り、葵に手を貸そうとするが、

「だ、大丈夫です。わたし、これで失礼します」

葵は慌てて自分で立ち上るとそう言い、廊下を走り出そうとするが、

「待て。本宮」

「え？」

自分を転ばせた男子生徒が葵の名前を呼ぶ。

「理音、お主の知り合いなのか？」

「ああ、小学校時代の友人だ。あの時より、いつそうと成長したようだな」

「……お主は少し言葉を選べんのか？」

葵が男子生徒に名前を呼ばれた事に意味がわからないと言った表情をしているなか、男子生徒は葵の胸に視線を集中させているのを見て、もう1人の男子生徒はため息を吐く。

第2問（後書き）

どうも、作者です。

理音と秀吉との遭遇です。

理音との再開が彼女にどう変化を及ぼるのでしょうか？

第3問

「えつ！？　えつ！？」

「本富、何を戸惑っているんだ？　落ち着くために俺特製の副作用ありの鎮静剤でも飲んでみるか？」

「……理音、久しぶりの再会なのじやろ。お主の事が誰かわかつておらぬよつじやぞ」

葵は目の前の男子生徒に心当たりがないせいか、慌てながら首を傾げていると、葵の名前を呼んだ男子生徒は葵の様子を見て懐から怪しげな錠剤を取り出し、葵が表情を凍り付かせると、もう一人の男子生徒がため息を吐きながら、葵へ助け舟を出し、葵は男子生徒に心当たりがないため、じくじくと頷く。

「ん？　そうか。本富はこの俺の事を忘れていたわけか。アキと言い本富と言い冷たいヤツらばかりだな」

「やうは言つても、お主は昔との面影は些無じやから仕方ないと思うのじやが」

(あれ？　この笑い方って、前田リオくん？)

男子生徒が笑うのを見て、葵はその笑顔に夢に見た幼い頃の友人の笑い方と田の前の男子生徒の笑い方が重なる。

「あの……間違つてたら、すいません。ひょっとして、前田理音くん？」

「ああ、そうだ。久しぶりだな。本宮」

葵は恐る恐る、男子生徒に聞くと男子生徒は葵の昔の友人の『前田理音』であり、理音は先ほどとは違った優しげな表情で笑う。

「う、うそー？　い、いつ、この街に帰ってきたんですか？」

「ちよくちよく手続きとかで戻ってきてたが、正式に戻ってきたのは1週間前だ。しかし、本宮が文月にいるなんてアキからは聞いてなかつたぞ。アキにはおしおきをしないといけないな」

「えーと、お手柔らかにしてあげてくださいね」

理音は葵の言葉に頷くとアキと言われる生徒に何かするつもりなんか邪悪な笑みを浮かべ、葵はそんな理音の様子に昔を思い出したよう苦笑いを浮かべる。

「えーと、本宮で良いのじゃんつか？　ワシは木下秀吉じや。前田が迷惑をかけたようですねのじや」

「本宮葵です。いえ、わたしは前田くんの突拍子もない行動には馴れてますから、気にしないでください。わたしJY。心配をかけてしまい申し訳ないです」

もう一人の男子生徒が葵に向かい『木下 秀吉』と名乗ると葵も釣られて自分の名前を名乗る。

「……馴れているとはそれはそれで凄いの？」

「確かに、そうですね。でも、前田くん、変わってないですか？」

葵と秀吉は理音の様子を見た後、顔を合わせて苦笑いを浮かべる。

第4問

「……何かバカにされてる気がするな」

「そんなことは無いですよ。わたしは変わらない。前田くんに会えて嬉しかったですから……」

理音は葵と秀吉が苦笑いを浮かべているのを見て、少し不機嫌そうな表情をすると、葵は少し慌てた様子で理音に言つたが言葉の途中で葵は言葉をつまらせた。

「何かあつたのか？」

「何も無いですよ」

理音は葵の様子を見て葵に聞くが葵は笑顔で何もないとは答えるがその笑顔はどこか無理をしているように見える。

「……どうか？まあ、本宮が話す気が無いなら、別に何も聞かないが、今のお前は俺とアキが初めてお前に会った時と同じ表情をしているんだ」

「……？」

葵の様子に理音は何かしら感じていてもひづりと葵は表情を強められる。

「……相変わらず、表情に出やすいヤツだな」

「そのふつじゅやの」

葵の表情の変化に理音がため息混じりで「ひひひ」と、秀吉も同じように元気な声で理音の意見に同意を示す。

「まあ、久しぶりの再会だし、俺の事を警戒するのもわかるからな。
気が向いたら話にっこ」

「は、はいー? で、でも、わたし、Aクラスになんか入つていけ
ないですよ……」

理音は葵に向かい言うと彼女は理音の言葉に声を裏返しながら返事をした後、理音がAクラスだと思つてゐるため、小さな声で「ひひ」。

「俺はFクラスだ」

「……ひ、ひうしてですかー!?

しかし、葵の心配をよそに理音は自分がFクラスだと「ひひ」と葵は意味がわからず声を裏返す。

「まあ、いろいろ会つてな……本宮、わるいな。俺はそろそろ行かないといけない時間だ。帰らせて貰ひ」

「は、はいー?」

「それじゃあ、また明日なのじゃ」

「ああ」

理音は用事があるよつて薬と秀吉を置いて歩き出す。

第5問

「……まつたぐ、お奴は自分の言いたい事だけ言つてからに、姉上に文句を言われるワシの都合も考えて欲しいのじや」

「あはは」

秀吉は理音の背中を見送った後、理音から優子に言伝を頼まれていたようだ、ため息を吐くと葵はそんな秀吉の様子に苦笑いを浮かべる

「本当に前田くんが帰つてきた事がよほび嬉しいよつで自分で言い聞かせのよひ元氣へ。

「まあ、夢ではないのじや。しかし、明久を見ておると理音が帰つてきたのは悪夢のようにしか見えるのじやが、お主はそうでもないよつじやの」

「一・二。」

葵の言葉は秀吉の耳にじつかりと入つたようで、秀吉は明久と葵の反応の違いに苦笑いを浮かべながら囁つと葵の顔は徐々に赤く染まつて行き、

「……なるほどのう。理音の囁つ通り、本当に顔に出やすいのう。まあ、理音は自分の恋愛系となると明久並に鈍そうじやから、気にしなくても良いと思つたが……」

「ち、違いますよー？　た、確かに前田くんはわたしの初恋の相手ですけ……ふえっ！？　ち、違います。今言った事はなしです！？　なしでお願いします！？」

秀吉は葵の様子に苦笑いを浮かべると葵は慌てて理音に恋愛感情はないと言おうとするが慌てているため、『理音が初恋の相手』だと言つ事を暴露し、さらに慌てて行く。

「本宮、少し落ち着くのじや、別にワシはそんな事を言つて回る趣味もないのじや。だから、心配する必要はないのじや」

「…………ありがとう」「わざとめめ」

秀吉は葵の様子に苦笑いを浮かべたまま彼女に向かい優しく言い聞かせるようついでに言つと、葵は秀吉のその表情に一瞬、きょとんとした後、大きく頭を下げる。

「そこまで感謝されても困るのじやが……そろそろ、ワシも部活があるから行へが、本宮、お主はどうするのじや？」

「わ、わたしも帰ります」

「そうか。本宮、また明日なのじや」

「はー。木下くん」

秀吉は部活に行くために葵に別れを告げると葵は大きく頭下げ、秀吉はその様子に少し困ったような笑みを見せた後、部室に向かい、

(わたしも帰れり)

葵は秀吉と反対側に歩き始める。

第6問

「なあ、アキ」

「何？ リオ！？」

理音は登校してきた明久に声をかけると明久は理音の方を向くと理音から明久に向けて花火が飛び、

「いきなり、何をするんだよ！？」

「……ちつ」

明久は何とかギリギリで花火を交わし、理音はその様子に舌打ちをする。

「理音、お主は朝から何をしておるのじや？」

「秀吉か、昨日のお仕置きだ」

「ちよっと、昨日のお仕置きって何だよ！？ ボクは理音にお仕置きされるような事はしてないよ！？」

秀吉は2人の様子に呆れ顔で話しかけてくると理音は昨日、葵に言った明久のお仕置きを実行しようとしており、明久は意味がわからずに戸惑う。

「明久、お主、本宮葵と言つ生徒を知つておるな？」

「本宮葵？……」

「アキ、お前のなかで友人とはあまり重要視されてないよつだな」

「ちょっと、リオ、待ってよ。葵ちゃんだろ。わかつてるよ。覚えてるからー？」

秀吉が苦笑いを浮かべながら、明久に葵の事を聞くが、明久は葵の事を覚えていないようで首を傾げると、理音は懐から怪しげな薬瓶を取り出し、明久はその薬瓶を見て顔を青くして言う。

「ほう。なら、聞いてみる」

「葵ちゃんだろ。ほら、ボクとリオが昔、助けて友達になつた巨乳の女の子」

「…………ひひ

「明久は思ひ出したよひじやが、そこで判別するのはどうかと思つてのじやが」

明久は慌てて葵の事を話し、理音はお仕置きができなくなつたため殴打をすると秀吉は苦笑いを浮かべたまま言つ。

「それで、葵ちゃんがどうかしたの？」

「昨日、会つたんだ」

「やつの。どい？」

「学園でだ」

「えつー!? 葵ちゃんも文月の生徒なの?」

明久は葵が文月にいる事を本当に知らなかつたよう驚いたような表情をする。

第7問

「ああ、俺は一日で本宮だとわかったが、お前は丸1年、同じ学園にいて本当に気づかなかつたのか？」

「だつてさ。中学は別のところに行っちゃつたしさ。と言つか、リオが気づく方がすこいんだよ。リオこそ、よく覚えてたよね？」

理音が呆れ顔で明久に言つと明久は苦笑いを浮かべながら言つ。

「まあ、俺はあれから変人扱いされてたから最終的にそばにいた奴らのは限られてたからな」

「……それもそうだね」

「それにな。当時ももの凄い破壊力を秘めてたが、再会してさらに破壊力が向上してたんだ」

明久の質問に理音が答えると明久は少し表情を曇らせるが、理音は全く気にせずに話して行く。

「それは見てみたいね」

「……お主達はそこにしか目がいかんのか？」

理音の言つ葵の一部分の成長具合に明久が眞面目な表情をすると秀吉は呆れたようにため息を吐くが、

「秀吉、お前は気にならなかつたのか？ あのたゆんたゆんを俺の

見立てでは瑞希を超える素材だ。男として、そこに目がいかないから、第3の性別とかわけのわからん事を言われるんだ」

「そりかの？」

「…………たゆんたゆん」

「ムツツツリーーーーー！」？

理音が葵の胸の事を言い切ると話に聞き耳を立てていたのが康太は赤い液体を鼻から撒き散らし、明久は康太を抱きかかえ、周りに助けを求めている。

「アキ、会つたら声くらいかけておけ、あいつ、また、1人になつてそうだからな」

「うん。葵ちゃんは自分から話しかけるの苦手だから、気にかけてみるけど、葵ちゃんって、何クラス？」

「聞いてなかつたな」

「そりじやな」

理音は彼なりに友人である葵を気にかけるが、どこか抜けている。

第7問（後書き）

いつも、作者です。

男の子な会話に呆れる秀吉。

理音の男の子な会話に秀吉は何かを感じるんでしょう？

まあ、今回、美波が聞いてたら、明久は死んでたな。（爆笑）

第8問

(……お昼、エイシヨウへ、購買は売り切れだし……)

葵はいつもお弁当を持参しているのだが、今日は朝、寝坊してしまい慌てていたため、お弁当を持ってくるのを忘れてしまい購買に行くが彼女はパンの一つも買えなかつたようだため息を吐く。

(学食は……今日はお昼抜きで良いや)

葵は学食を覗き込むが学食は昼食を取る生徒達でじつた返しており、彼女には席を確保する事も、気軽に一緒にと言つてくれる友人もいないため、昼食を諦め教室に帰つとした時、

「本宮、」となとじりで突つ立つて、何かあつたのか?」

「あつー? ホントだ。葵けやんだ」

「前田くんに吉井くん?」

両手に飲み物を抱えた理音と明久が葵に声をかける。

「久しふり、葵ちゃん」

「はー。吉井くんもお久しふりです」

葵と明久は再会に挨拶を交わし、

「本宮、」などとじりて立つてどうかしたのか?」

「えーと、お弁当を忘れてしまって。購買でパンを買おうと思つたんですけど……」

「その様子じや、買えなかつたようだな。相変わらず、鈍いヤツだ」

「す、すこせん」

理音は葵に向かい、ため息混じりで囁つと葵は申し訳なさそうに小さな声で答える。

「ちよっと、リオ。言い過ぎだよ。リオはあまりこないから、簡単に言つけど、お昼の購買は戦争何だからね」

「戦争なら、群がるヤツらを四散させれば良い」

「あつ！？ そうだね。今度、ボクが購買に行く時は手伝つてよ」

「こつになるかはわからんが、協力しよう」

明久の言葉に理音はその時の事を思い浮かべたのか、邪悪な笑みを浮かべて頷くが、

「ダ、ダメですよー？ そんな事をしちゃーーー？」

葵が顔を真っ青にして2人を止めに入る。

「あはは。ですがに[冗談だよ。第一、リオが手伝ってくれたら、田的のパンも四散しちゃうからね」

「アキ、俺をナメるなよ。それくらい計算できない俺だと思つのか？」

「うわ。どうじゅう。めちゅめちゅ、リオに頼みたくなってきた」

「だ、だから、ダメで……ぐー」

葵は理音と明久を止めようとするが、タイミング悪く彼女のお腹の虫が悲鳴を上げ、葵は顔を真っ赤にする。

「あはは。かわいい音だね」

「い、言わないでください」

「本當、お前、匂はびつするつもりだ?」

「えーと、学食に」

「やうか。なら、ついてこい」

「えつー? エフー?」

理音は葵の嘘に氣づいたよつてやうに、彼女を引つ張つて歩き出し、

「あはは。葵ちゃんも変わつてないな」

明久はその様子を見て、苦笑いを浮かべた後、2人を追いかけて行く。

第9問

「ただいま」

「遅いぞ。明久、理音……なあ、こいつはどうしたんだ?」

葵は理音に引きずられて2・Fクラスの教室に入ると、Fクラス代表の坂本雄一が2人を出迎えた後、理音の手に捕まれ小さくなっている葵を見て、首を傾げる。

「さつき、明久が購買で引っかけたんだ」

「何を言つてるんだよ。葵ちゃんを連れてきたのはリオだろ？」

理音は何か思いついたようで邪悪な笑みを浮かべると、明久はため息混じりで理音の言葉を否定しようとするが、

「へえー、この子、誰? うちにもわかるように説明してくれるよ?」

「そうですね」

「ちよつと、美波に姫路さん!… どうして、ボクに関節技を決めようとするの!…」

瑞希と美波は笑顔で明久の腕をつかむ。

「姫路、島田、止めんか。それで、明久、理音、どうして、本宮を連れてきたのじゃ?」

秀吉は葵と面識があるため、疑問を口にする

「昼飯を食いつぱぐれそつだつたからな」

「なるほどのう。本宮、こつまでも立つてないで座るのじや」

理音は簡単に葵を連れてきた理由を話し、秀吉は昨日と今の中の葵の様子を見て納得したようで頷き、葵に座るよつて言つ。

「えーと、良いんですか?」

「理音と明久が誘つたんだる。なら、遠慮なんてするな」

葵は知らない人から明久が関節技を決められているのを見て、怖いよつで小さな声で確認すると、雄一は当たり前だと言い切り、

「それじゃあ。お邪魔します」

葵は小さくななりながら、理音と秀吉の間にひよこと座る。

「おー。アキ、瑞希、島田、こつまでも遊んでるな」

「ちよつと、この状況を遊んでるの一言で片付けないでよー?」

理音は葵が座ったのを見て、3人に向かいに言つと明久からは悲鳴混じつの返事が返つてくる。

第10問

「あの、前田くん、そろそろ止めた方が

「流石は葵ちゃん……ぶほつ！？」

葵は明久が女子2人から間接技を受けているのを見て、少し怯えながら言うが、その一言で明久への攻撃はいつそう強まる。

「理音、そろそろ止める。飯の時間がなくなる」

「やうじやのう」

雄一がため息混じりで言つと秀吉は同意をし、

「仕方ないな。瑞希、島田、こいつが誰か説明するから、手を放せ」

理音はつまらなさそうに瑞希と美波に向かい言つた時、「ペペペ」と言つ本來、教室では聞くはずのない電子音が響く。

「炊けたみたいだな」

「炊けた？」

雄一はその音を聞き、当たり前のよひに炊飯器を開けると炊きたての「」飯をよそつて行く。

「えつ！？ えつ！？」

「本町、うぬやこや。せり、飯だ」

「あ、ありがとひーじゃこやか……つて、違いますよ。何で、教室で『飯を炊いてるんですかー?』

「黙れ」

「……はー」

状況がわからない葵は今のありえない状況に驚きの声をあげるが理音に一括され、黙り込む。

「……理音、お主は説明もしておらんのか?」

「必要ない」

秀吉が葵の様子を見て、理音は言ひつけられ、一言で終わらせ、

「本町、今日は焼き肉をしようとした話になつておるのじや」

「焼き肉ですか? …… 烤肉、教室でー?」

秀吉はため息を吐きながら、葵に説明をするが、学園での食事ではありえないメニューに葵は驚きの声をあげ、

「うぬやこや」

「はい……すこません」

理音に一括され、葵は小さくなる。

第11問

「……あの

理音に一括され、葵が黙っていると田の前に用意されていたホットプレートに電源を入れられ、クーラーボックスから出された牛肉が焼かれて行く。

「本宮、タレは甘口と辛口どっちが良い?」

「あ、甘口でお願いします」

「ほり

「あ、ありがとうございます」

葵は田の前で繰り広げられている状況についていけずに顔をひきつらせていると、

「理音の留学時代の知人から、大量に牛肉が送られてきたらしくてのう。食べきれんから、みんなでと言つ事じや」

「で、ですけど、この状況にはつながりませんよー?」

「本宮、黙れ」

「は、はい!?」

秀吉が苦笑いを浮かべて葵にこの状況に至った経緯を説明するが、

葵が納得できるわけもなく声をあげるが二度、理音に一括られる。

「あんまり、細かい事を気にしないで食つたらどうだ？　昼休みは限られてるんだしな」

「で、ですか？」まだ、学園ですし、制服に匂いとかつこちやうし……へー」

雄一は焼き肉を口に運びながら葵に向かって言つて、葵は制服に匂いがつく事を気にしているが焼き肉の匂いに刺激されたよひで彼女のお腹の無視は悲鳴をあげる。

「匂いなら気にしなくて良いみたいよ。前田の作った無害の消臭剤があるみたいだから」

「やつぱり、気にになりますよね」

「はい。やつぱり、気になります」

明久を沈め終わつたよひで、瑞希と美波が葵に向つて、彼女は顔を赤くして頷く。

「無害は強調されるんだな」

「やつぱりやつぱりの」

「まったく、副作用のないもののビヨンが面白いんだ」

「…………面白い、面白いしないの問題じやない」

女子生徒3人はやはり、昼間の学園での焼き肉は抵抗があるようだが、瑞希と美波に沈められた明久以外の男子生徒4人は焼き肉の匂いなど気にせず食事を続けていく。

第1-2問

「理音、そろそろ、」いつの紹介してくれないか？」

「ん？」いつは本宮葵。見ての通り、巨乳のメガネつ娘だ

「雄一は焼き肉を口に運びながら、理音に葵を紹介するように元気いっぱいに『やつと、相変わらず、理音の葵の紹介は巨乳が主であり、

「……この子は本宮葵じや。明久と理音の小学校時代の友人だそうじや」

「も、本宮です」

秀吉は理音の紹介にため息を吐きながら、葵を紹介すると葵は慌てて頭を下げる。

「ん？ 明久と理音と同じ小学校なら、姫路とも知り合いじゃないのか？」

「瑞希とは同じクラスになつた事は無いんじやないか？」

「そりなの？」

「はい。無いと思ひます」

「そりですね」

「雄一は葵と瑞希は面識がないのかと聞くと葵と瑞希はお互に面識

がないよ」で苦笑いを浮かべながら頷く。

「えーと、俺達も名乗った方が良いよな。Fクラス代表の坂本雄一だ

「その妻の翔子です」

「翔子！？ 何でお前がここにいる？」

雄一が葵に名乗るといつも間にか翔子が雄一の隣に座つており、葵に向かい頭を下げる。

「あつ！？ はい。お噂は聞かせていただいてます。『婚約なさつてこるつて

「来年の雄一の誕生日に籍を入れます」

「嘘を吐くな！？」

「雄一」「ひぬやこ」

「翔子、止めるー。割れるー！」

葵は翔子に向かい頭を下げるなか、雄一は声をあげて否定すると翔子は雄一にアイアンクローバーを喰らわせる。

「……えーと？」

「気にするな。こつもの事だ」

葵が2人の様子に引きついた笑みを浮かべると理音は気にするなど言い切り、

「ウチは島田 美波。よろしくね」

「姫路 瑞希です」

「はい。よろしくお願ひします」

雄二が翔子にアイアンクローバーをされているのはすでに日常になつているため、瑞希と美波も気にする事なく、自分の名前を名乗ると葵は改めて頭を下げ、

「康太、いつまでも本宮の胸を見てないで名乗れ」

「…………見てなどいない」

理音は葵の胸を凝視していた康太に言つと、康太は否定するが目線が逸れる事はない。

第1-3問

「えつー?」

「…………土屋 康太」

葵は理音の一言に慌てて、自分の一部分を隠そうとするなか、康太は自分の名前を名乗る。

「素晴らしい素材だろ。本宮は着やせをするタイプなのにこのボリューム。俺の見立てでは、瑞希より、1・5311センチ上だ」

「…………1・5282」

「何ー? すまない。康太、計り損ねた」

「…………理音も良い」とここまで行つていて

理音と康太の間で葵の胸の話になつていてのを見て、葵は恥ずかしいようでは耳まで真っ赤にしている。

「…………お主らは本人の前で何を言つておるのじや」

「そ、そつよー! 胸の大きさですべてが決まるわけじゃないのよー!」

秀吉が理音と康太の様子にため息を吐くと美波は自分に言い聞かせるように叫ぶ。

「当たり前だ。形と感度も重要だ……」

「………… 理音の言ひ通り」

美波の言葉に理音が言ひと康太は大きく頷く。

「……本富、理音と明久が誘つたとは言え、なんかいろいろとすまんのじゃ」

「いえ、木下くんは気にしないでください。実際はわたしが悪いわけですし、前田くんと吉井くんが誘ってくれなかつたら、お昼抜きだつたわけですし」

「それですけど、どうして……」

「今日、寝坊して、お弁当を忘れてしまいました。購買に行つたんですけど、わたし、鈍いから一つもパンを買えなくて」

「やうなんですか。確かに購買は女の子にはつらいですね」

「はい……」

ホットプレートの周りが混沌としているなか、葵、秀吉、瑞希の3人は緩い空気を出しながら焼き肉を食べる。

第14問

「ねえ。本宮さん」

「はい。何ですか？」

焼き肉を食べ始めてしばらくすると美波が葵に話しかける。

「アキと前田とどうして知り合ったの？」

「それは私も聞きたいです」

美波は葵が理音と明久の2人と知り合った時の事を聞きたいようで
葵に質問すると瑞希も聞きたかったようで便乗する。

「えーとですね」

「ん？ 本宮、どうかしたか？」

「理音、お主は相変わらずじゃの」

葵は2人の質問に昔の事を思い出しているのか、理音の顔をちらちら見ると理音は首を傾げ、秀吉は理音の様子にため息を吐く。

「ん？ 何がだ？」

「な、何でもないです。前田くんは気にしないでくださいー。」

葵は首を傾げている理音に向かい言つて、

「本宮さんの相手はアキじゃないみたいね」

「そうですね」

瑞希と美波は葵が明久狙いではないと感じたようで安堵の声をあげる。

「それで、結局、どうやって知り合つたんだ？」

「ん。別に変わった事などない。本宮が今のようにぐべじぐじと後ろ向きな態度をしていたから、イジメの対象になっていた。アキがそれをたまたま見かけてな。俺は巻き込まれた」

「ほう。明久にも良いところがあるのじやな」

雄一が3人の出会いを改めて聞くと、理音は隠す必要性がないと思つているようで『葵がイジメにあつていた事』をあつさりと話し、秀吉が未だに落ちている明久を眺めながら頷く。

「吉井くんは昔から、優しかつたですから」

「優しいと言つか、空気を読めないバカなだけだ。力もないのに1人で突つ込むようなヤツだからな」

瑞希が頬を赤らめながら、明久を讃めるが、理音はその時の事を思い出しているのか、呆れたようなため息を吐く。

「…………そんな明久を助けた理音も同類」

「……土屋の言つ通り

「さうかも知れませんね」

「……」

理音の態度に康太と翔子がうなづくと葵はクスクスと笑い、理音は微妙な表情をする。

第15問

「……別に助けた気はない。ただ、新しい火薬の実験台にちょうど良かつただけだ。あいつらがいなければ、アキを実験台にしただけだしな」

理音は周りから言葉にじりつて心をして良いのかわからぬようで不機嫌な口調で言つと、

「それなら、本宮まま、実験台にすれば良かつたわけだろ?」「それでも、かまわなかつたが、それをやるといつもセイヤツがいたからな」

「雄一は理音の様子に攻撃箇所を見つけたようでニヤニヤと笑いながら言つが、理音は未だに焼き肉にありつく事ができずに動かない明久を見てため息を吐く。

「確かに、吉井くんなら、そうしますね」

「バカな分、これと決めたら一直線だからな。面倒なんだ」

理音と瑞希は小学生時代の明久の事を思い出していよいよ苦笑いを浮かべてる。

「……理音が、吉井に引きずられてるのは意外」

「やつね。今じゃ、前田がアキを引きずり回してる感じだもんね」

「確かにやつじゅの」

理音の話に翔子、美波、秀吉が言つが、

「そんな事ないですよ。私は前田くんはひかりかと言えば、吉井くんに引きずられている印象の方が強いです。吉井くんは誰にでも笑顔で話しかけてくれますから、さつきの2人の様子を見ていたら、たぶん、今も変わつてませんよ」

葵は小学生時代の明久と理音の姿を思い出して「この2つと笑う。

「へえ、 そりなんだ」

「意外だな」

美波と雄一が理音の顔を見て「ヤーヤ」と笑うとその様子を見て、瑞希と秀吉は苦笑いを浮かべ、理音は不機嫌そうな表情をしながらも、

「本宮、霧島、そろそろ教室に戻れ」

昼休み終了の時間を2人に教えると、

「えつー!? もうそんな時間ですか?」

「……本当。理音、『やつじゅわても』

「2人とも臭い消さないと」

葵と翔子が立ち上ると美波が理音の消臭剤を2人に振りかける。

「あつがとうござります」

「……あつがとう」

葵と翔子は美波に礼を言ひと教室を出て行く。

第16問

(……今日も1人か)

葵は誰もいなくなってしまった教室で一人でため息を吐きながら掃除をしている。

(……わたしはどうしてこうなんだろう? ウジウジして言いたい事も言えないんだろう?)

言いたい事が何一つ言えない自分が悔しくて涙が溢れそうになるが、人に見られてしまうのではないかと思い、涙を押しとじめようとしました時、

「葵ちゃん、いる?」

「明久、待つのじゃ。根本に見つかると面倒じゃぞ」

「でも、誰も……あつ 葵ちゃん、良かつた。まだいてくれて」

勢いよく教室のドアが開き、明久と秀吉が教室に入ってくる。

「ど、どうしたんですか!?」

「……」

葵は慌てて笑顔を浮かべて、2人が教室に来た理由を聞くがその表情は固く、葵の表情に秀吉は何か気づいたのか眉間に小さなシワができるが、

「これから、暇？ なんかリオがクレープ奢ってくれるって言つん
だけど、葵ちゃんも行かない？」

明久は全く気づいていないようで田の前にぶら下げるクレープられた餌の事を
思い浮かべているようで楽しそうに言つ。

「わ、わたし、教室の掃除があるから」

「1人のようじゃが、他の者はどうしたのじゃ？」

葵は自分がクラスメートからいじめを受けている事を知られたくないのか、明久からの誘いを断ろうとするが、秀吉は葵以外に誰もない教室と葵の表情を見て言い、その声にはBクラスの人間達への怒りが見える。

「それが今日はみなさん急ぎの用事があるみたいで」

「そりなの？ それなら、手伝つよ。秀吉も良いよね？」

「もちろんじゃが、人数を増やせばはかどるじゃろ？し、理音は…
：先に怜生くんを迎えておるから、姫路や島田に手伝つて貰
うとするかのッ」

「そうだね」

明久と秀吉は瑞希と美波を助つ人に呼ぶ。

第17問

「お待たせしました」

「待つた?」

秀吉の連絡からじぱらくすると瑞希と美波がBクラスの教室に入ってきた、当たり前のよう掃除を始め出す。

「あ、あの……」

葵は明久以外の3人が当たり前のよう自分の手伝いをしてくれる事に戸惑いを隠せないよう何かを言おうとするが言葉が上手くでこない。

「どうかしましたか?」

「あの……どうして? 手伝ってくれるんですか? 私は……」

瑞希が葵に向けて優しげな笑みを浮かべて聞くが、葵は自分がいじめにあつている事を隠せていないとわかりながらも言葉をつまらせてしまつ。

「簡単な事ですよ。わたしも吉井くんも美波ちゃんも木下くんも本富さんを友達だと思つてますから」

「でも……」

「でもは無しよ。だいたい、高校生にもなつてこんな事するのが信

じられないわ」

瑞希は葵の様子にすべてを悟つて「いつに言つたが、葵は信じられないよつで何かを言おうとするが、美波は葵をいじめている人間の事が許せないよつで葵の言葉を遮る。

「成績が良くてもそんな事がわからないなんて許せないわ」

「まつたぐじゃ」

美波の怒りの言葉に秀吉が同意をすると、

「知つてますか？ Fクラスは成績が悪いとバカにされますけど、みんな吉井くんと同じで」「いつ事は許せないんですよ」

「やつみたいですね……あの時と一緒にです」

瑞希は1人で掃除を続けている明久を顔を赤らめて見ると葵は理音を連れて自分を助けてくれた明久と今の明久が何も変わっていないと思つたよつで、少し無理をしながらも笑顔を見せる。

「みんな、サボつてないで手伝つてよ」

「わかつてるわよ」

「やつじゃの。理音を待たせると後が大変じゃねりの」

「ですね」

明久の言葉に秀吉、瑞希、美波が掃除を再開すると、

「あ、あの。手伝つてもうつてありがとハレマセ」

葵は4人に向かい頭を下げる

「良いから、早く終わらせよ。これが終わればクレープなんだよ」

「やつやつ」

葵を誰も責める事はなく4人は葵に笑顔で言つた。

第1-8問

「みなさん、ありがとうございました」

「だから、やつをも言つたよ。変に『氣を使わないでよ』

掃除が終わり、葵は改めて頭を下げる。変な氣を使わないでよ
を見て苦笑いを浮かべる。

「ですか……」

「本當もやう今までじや、あまり遅くになると理音から文句を言われる
しのう」

「やうやう。あこつ細かい事がつぬれこのよね。変なもの持ち出す
し」

秀吉と美波は理音の事を話ながら苦笑いを浮かべると、

「そうかも知れませんね」

「やうですね」

葵と瑞希は2人の言葉に苦笑いを浮かべて頷く。

「それに姉上と前田、雄一に霧島、マッシュローーでは、怜生くんが
泣き出してしまつかも知れんしのう」

「確かに、雄一がおかしな事を言つて霧島さんに何かされてそ�だ

ね

このメンバー以外に優子、雄一、康太、翔子も同伴しているようで
明久と秀吉は苦笑いを浮かべたまま言つ。

「確かにね。それと前田が怜生くんに何かおかしな事を吹き込んで
ないかも心配よ」

「やうじやのう。理音はなぜか怜生くんには下ネタばかり教えてい
る気がするのじや」

秀吉と美波は理音の怜生への教育の仕方に不安を感じているようで
ため息を吐く。

「でもさ。理音も怜生くんと2人でいる時はそんな話はしてないと
思つよ」

「そうだと良いのじやが……」

明久は苦笑いを浮かべたまま理音側に回るが周りの反応は薄く、

「葵ちゃんも、そう思つよね？」

「えーと……今はわかりませんけど、前田くんは聞かれた事は面倒
じゃなければ答えてくれますし、怜生くん次第じゃないかな？
……と」

葵に助けを求めるとき葵は苦笑いを浮かべ、

「……土屋もいるのよね？」

「急ぎましょか？」

理音と康太が怜生への性教育をしてるのではないかと言う不安が全員によぎつたようで5人は急いで合流場所に向かう。

第1-9問

「えーと、あれ何でしょ?」

「ム、ムツツリーーー!-?」

葵達が理音達との合流場所に近づくと遠目に見える人影から赤い液体が吹き出て明久はその様子を見て、全力で駆けだして行く。

「……心配していた事が実際に起きたようじゃのう」

「そうみたいね」

秀吉は康太が鼻血を出して倒れたと察した上でため息を着くと美波は苦笑いを浮かべる。

「えーと、まだ、前田くんがおかしな事をしたとは限りませんよ」

「で、ですよね」

瑞希は苦笑いを浮かべながら、理音をフォローし、葵が同意をした時、

「ふほつー?」

康太に駆け寄ったはずの明久が康太と同様に赤い液体を吹き出し前のめりに倒れる。

「……えーと? あそこにいかないといけないんですね?」

「残念ながらセイジやの」

「……他人のふりしたくなつてきたわ」

「あはは」

明久が倒れるのを遠田から眺めていた4人は引きつった笑みを浮かべながらも合流場所まで歩くと、

「やつほー みんな遅かつたね。ボクも一緒にセイジやな?」

「工藤さん?」

「……ムツツローーと明久が倒れたのはお主のせいじゃな?」

「木下くん、人を疑うのは良くないよ」

合流場所にはメンバーに入つていなかつた工藤愛子の姿があり、彼女は明久と康太を沈めた事に気分が良いのか、楽しそうに笑っている。

「えーと? ……」

「あつー? 君が葵むすめんだね。ボクは△クラスの工藤愛子。よろしくね」

「は、はい。本宮葵です。よろしくお願ひします」

葵は愛子とは面識がないため、瑞希と美波の後ろに隠れていると、

愛子は笑顔で葵に挨拶をする。

第20問

「……工藤、お主はいったい何をしたのじゃ？」

「木下くん、ボクは何もしてないよ。ただ、ムツツリーーくんがボクのスカートの中身に興味がありそうだつたから」

「お主はいったい何をするのじゃ！？」

秀吉が大量の鼻血を流して道路に倒れ込んでいる明久と康太に視線を移しながら愛子に聞くと愛子は笑顔で自分のスカートをめくり、秀吉は愛子から視線を逸らし、明久と康太からは再び、鼻血の噴水があがる。

「別の中に邵ツツはいてるし、そこまで驚かなくて良いよ。まあ、何も反応がないのも残念なんだけどね」

愛子は3人の反応を見て楽しそうに笑いながらも自分の行動に反応しない理音に視線を向ける。

「邵ツツには邵ツツの良さがある。良いか……」

「言わせないわよ！？ あんたはビリして、怜生くんにおかしな知識を『えようとあるのよ……』

「邵ツツをはいてるとは言え、そいつのは人前ではやらない方が……」

愛子は理音に視線を向けると理音は邵ツツの良さを語りつとする

が優子がそれを止めに入り、2人の様子を見て、葵は何かを察したのか声のトーンを落としながら愛子に止めた方が良いと言つ。

「ふーん。なるほどね。前田くんも罪作りだね」

「何を突然言い出すんですか！？」

「本宮、それは肯定してると変わらんのじゃ」

愛子は葵が声のトーンが変わったためニヤニヤと笑いながら葵を見ると葵は全力で否定し、秀吉は葵の態度に苦笑いを浮かべる。

第21問

「ん？ 本宮、何があつたか？」

「な、何もないです！？」

理音は葵が慌てているのを見て、彼女に声をかけると葵は全力で何もないと言つが、

「……なんで、あの娘は、女の子扱いされるのよ」

優子は葵の反応に自分のなかにある感情が彼女のなかにあると気づいたようで、理音が葵の事を気にかけていると思ったのか機嫌が悪そうにつぶやいている。

(あつ！？ やつぱり、あの人、前田くんの事……)

葵はそんな優子の様子に自分の考えている事が確信に変わったようでつむきかけた時、

「理音、雄一と霧島はどうしたのじゃ？」

秀吉はこの空気に耐えきれなくなつたのか、この場にいるはずの雄一と翔子の2人がいない理由を聞く。

「あの2人か？ 結構、大所帯だからな。先に行つて席を確保して貰つてる」

「確かに、結構いるしね」

「そうですね」

「なるほど、確かに雄一は上手く交渉してくれそうじゃが……」

理音は2人がい理由を簡単に説明すると瑞希と美波は納得した
ようで頷くが、秀吉は理音が雄一を罵にはめた気がしているのか、
苦笑いを浮かべる。

「まあ、2人には先に始めててくれと言つてあるから、今はお楽し
みだらうな」

「……やはりのッ」

理音は翔子に捕まり、逃げられない雄一の姿を思い浮かべて邪悪な
笑みを浮かべると秀吉は呆れたようなため息を吐く。

「秀吉、どうかしたか？　俺は友人2人の恋愛を応援してるんだぞ」

「確かにそうかも知れんがあまり力づけてやるものどうかと思つ
じやが……」

「なに、2人で喫茶店にいるだけだ。さつと仲良くなつていいの」

楽しそうに笑う理音を見て、秀吉は深いため息を吐いてる隣で、

「そうです。さつと『あーん』とか言って坂本くんが翔子ちゃん
にケーキを食べさせてあげてるんですよ」

「そうよね。霧島さん、ついやめしないなあ」

瑞希と美波は田を輝かせている。

「優子、お前は妄想の世界に旅立たなくて良いのか?」

「し、しないわよー? そんな事ーー。」

理音は妄想は優子の得意技だと思っているため、優子にふると彼女は声をあげて否定する。

第22問

(……前田くんもあの人の事が好きなのかな?)

葵は優子相手に軽口を叩いている理音を見て、落ち込みかけていると、

「……お姉ちゃん、大丈夫?」

「うん。 大丈夫だよ。 怜生くん」

怜生が葵の姿に気づいたようで、葵のそばまできて声をかけ、葵は怜生に心配かけないようになると笑顔を見せる。

「あれ? 葵ちゃん、怜生くんの事を知つてたの?」

「知つてるも何もさつき余話にてたでしょ」

明久は愛子のスペックのダメージを引きずつてるのでフフフフと立ち上がりながら、葵から怜生の名前がでた事に首を傾げると、美波は呆れ顔で突っ込み。

「わたしも昔、吉井くんと一緒に、怜生くんが赤ちゃんの時に会つてますしね」

「そ、そうだよね」

葵は明久の様子に苦笑いを浮かべながら言うと、明久は理音に聞くまで怜生の存在を忘れていたため、葵から目を逸らす。

「本宮は覚えておったようじゃのう」

「そつみたいですね。でも、4年以上も前の話ですし」

葵と明久の様子に秀吉はため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべ、明久をフォローしようとするが、

「まあ、バカだから、記憶する容量が少ないからな。必要ないと判断したものはすぐに『リードしない』と容量が間に合わないんだ」

「そうね。アキだもんね」

「ちよつと、リオに美波、さすがに言い過ぎだよー…？」

理音は明久を小バカに美波が同意すると明久は心外だと聞いたげに声をあげる。

「……」

「本宮さん、どうかしたの？」

葵が理音と明久のやりとりを見て「ふと優子と愛子が葵に近づいてくる。

「いえ。前田くんも吉井くんも昔と変わらないなあ……って

「そりなんだ」

葵は理音と明久の様子に小学校時代の事を思い出したようすべく

すと笑うと愛子は納得したように頷くが、

「……」

優子は自分の知らない理音を知っている葵に嫉妬の視線を向ける。

第23問

「優子、素直にならない」と葵ちゃんに前田くん、取られちゃうよ

「な、何を言つてゐのよー? あ、あたしは別に」

愛子は葵に敵意の視線を向けている優子を見て、イタズラな笑みを浮かべて周りに聞こえないように耳打ちをすると優子は慌てて否定する。

「まあ、認めないなら、ボクは良いけど、前田くん、そろそろ行こう。代表と坂本くんも待つてゐるだろ?」

「いや、ちょっと待て」

愛子は理音に雄一と翔子に合流しようとが理音はその言葉を制止すると制服から携帯を取り出しつづけ

『霧島、後、どれくらひ2人つきりで居たい?』

と素早くメールを打つと、

『すすみ』

すぐに翔子から返信されてくる。

「あいつは2人で良いだろ」

「そうですね。デートの邪魔になっちゃいますし」

雄二の意見など聞かずに翔子の意見だけを取り入れ、瑞希は雄二と翔子の姿を仲の良いカップルに脳内変換しているため、目を輝かせながら頷く。

「それじゃあ、どこにするの？」

「場所変えるなら、駅前の『ラ・ピュセル』とかどうかな？ クレープが美味しいってウワサなんだけど」

「あ、そこ、わたしも聞いた事あります」

明久は理音の言葉を理解すると次の店を考え始め、その言葉に愛子はある喫茶店の名前をだすと葵は同意するが、

「そこは却下だ」

理音は名前がでた喫茶店に何かあるのか拒絶する。

「それなら、どうするの？」

「ワシらも喫茶店はあまり行かんからのう」

優子と秀吉が首を傾げた時、誰かの携帯がなる。

「………… 明久、電話」

「うん。…………あれ、誰だろう？ 非通知だ」

明久は制服から携帯を取り出し、電話にすると、

「……明久、お前を殺す」

「どうしよう。こきなり、知らない人から殺人予告されたよーー？」

電話の相手は雄二のようで明久に殺人予告が発せられ、明久は雄二が相手だと気づいていないようで身に起きている恐怖に身体を震わせる。

「雄二、もう少ししたら行くから待って」

「本当だうな。他の店に行こうとしたたりしないよな？」

理音は明久から携帯を取り上げて雄二に口ではもうすぐ行くと言つが、雄二は当然、疑つてかかり、

「…………」

「おいー？ 何だ、今の舌打ちは？ おい。理音、な……」

理音は舌打ちをすると雄二は理音に文句を言つ始めるが、理音は平淡と携帯の電源を落とす。

「…………お兄ちゃん、行こう

「ああ。行くぞ」

怜生が理音に向かい言つと、理音は優しく微笑み、怜生の手をつかみ。

「店が見つからないから、あいつらが待ってる店にするぞ」

雄一と翔子がいる喫茶店に向かつ。

第24問

「それで、これって何の集まりなんですか？」

「この間、前田の家の引越を手伝つたお礼だつてさ」

「ボクはこの間、玲生くんと遊んだら、そのお礼だつて誘つてもらつた」

葵はどうしてこんな人数が集まっているか聞かされていないため、首を傾げると美波と愛子が葵に説明をする。

「わたし、何もしてないのに良いんですね？」

「良いの。良いの。リオが奢ってくれるって言つてるんだから、葵ちゃんは気にしなくて良いの」

葵は自分が場違いだと思ったようで遠慮がちに言つと明久はすでにエネルギーを摂取できる事が嬉しいようで笑顔を見せ、

「……瑞希、島田。余所見してると危ないぞ」

「は、はい。すいません」

「前田、助かったわ」

そんな明久の笑顔に見とれていた瑞希と美波は車道に出でつになり、理音は2人の首根っこをつかむ。

「べつに気にするな。だいたい。何もしてないと云つなら、優子もあまり変わらんし、康太もきてないしな」

「確かに、姉上はすぐに足を痛めておったからのう」

「わるかつたわね。と云つか、女子に力仕事をさせたあんたが悪いんでしょ」

理音は優子は役立たずだつたと言つと秀吉はその日の事を思い出してため息を吐き、優子は理音が悪いと言つたげに不機嫌そうに云つ。

「…………理音が秀吉のお姉さんを傷物にした」

「ムツッソリーへん、その言い方は誤解を産むよ」

康太は理音と優子の様子にポツリとつぶやくと愛子は康太の言葉を聞いて楽しそうに云つ。

「傷物になんて……前田くん、何をしてるんですかー！ 責任をとれるんですけどー！」

「…………本宮、お前は何を勘違いしてるんだ？ 俺は優子に何もしてなくないな」

葵は康太と愛子の言葉に何かを勘違いしたようで顔を真っ赤にして声をあげると理音は否定しようとするが、何かが引っかかる。

「ねえねえ。優子に何したの？」

「ん？ 工藤、お前は知ってるだろ。胸を……」

「理音！－ それ以上言つくな！」

愛子は理音の様子に楽しそうに聞くと理音は平然と優子の胸を揉んだ事を話そうとすると優子は全力で理音を止めるが、

「ああ。あれだね。確かにリオはお姉さんの胸を揉んでるから、傷物にしたと言えなくもないね」

明久は空氣を読まずに言つ。

第25問

「吉井くん、ちょっと良いかしら」

「え？ 秀吉のお姉さんからのお誘いなら、ボクが断れるわけ……」

「吉井くん」

「アキ」

「えっ？ 何？ 姫路さんも美波もどつしたの？」

優子は空気を読まない明久を見て、完全に頭に血が上ったようで、得意の逆間接をかけるために明久を笑顔で呼ぶと明久は優子について行こうとするが、良い笑顔の瑞希と美波に肩を捕まれる。

「優子、残念だらうが、アキへの体罰は次の機会にしり」

「……別に体罰なんて」

肩を捕まれ、路地裏へと連れ込まれて行く明久の様子に理音が表情を変える事なく言つと、3人の様子を見て、優子は少しだけ冷静になつたようで頷く。

「へえ～、優子が前に隠してた秘密ってそれか。でも、もう隠す必要ないよね？」

「そ、そんな、まだ、わたしたちは高校2年生です。そんなのは早いです」

「愛子はニヤニヤと優子を見て言い、葵は愛子とは対照的に落ち込んだよつて話だ。

「優子は前田くんから保健体育の実技を個人レッスンを受けてるんだし、今更、隠す事じゃないしね」

「ち、違うわよ！？ おかしな事を言わないでよ！？」

愛子は優子をからかい始めるが優子は顔を赤くして否定していく。

「……」

「本宮、お主、大丈夫か？」

葵のなかでは、先ほどのやりとりすでに理音と優子は付き合つていると思つたようでは表情を暗くすると、秀吉は彼女の様子に気づいたようで心配そうに彼女の顔を覗き込む。

「だ、大丈夫です。心配しないでください」

「……やつじゅのう。一応は、ワシは立場的にビツツオローハーしてよいかわからんしのう」

葵は秀吉の様子に少し無理をしたように笑うと、秀吉は現在、自分が一番微妙な位置にいる事を理解しているせいか苦笑いを浮かべる

「まあ、ワシは姉上が理音の事を好いておる事を知つておるゆえ、あまり、お主の肩を持つわけにもいかんのじゃが、お主の考えは早

合点じや、まだ、2人まつわおつてはおりそ

「 なんですか？」

「 理音せどりも鈍いよひじのう」

葵に理音と優子は付き合つていないと教え、2人を交互に見てため息を吐く。

第26問

「前田くんが鈍い？」

「ん？ 何かあつたのか？」

秀吉の言葉に葵は首を傾げると秀吉は葵が首を傾げている理由を聞く。

「い、いえ。わたしのなかにある世の前田くんと違つてたので」

「やうなのか？」

「はい。前田くんも吉井くんも小学生の時は人気ありましたし、吉井くんは気づいてなかつたみたいで、前田くんはそれなりに返事をしてたと思います」

葵は昔の理音と明久の様子を思い出してもうひとつ、

「……しかし、そのようには見えんのじゃ」

秀吉は理音と優子を眺めながら言つ。

「おい。本町、秀吉、そろそろ行くぞ。雄二からの電話がつるやしない」

「わかつたのじゃ……まあ、理音もあつちで研究ばかりしていたよ
うじやから、昔とは変わつてこぬのじゃ」

「やつですね」

理音が携帯電話を見ながら葵と秀吉を呼ぶと二人は話を切り上げて前を歩いていくメンバーに追いつくと、

「秀吉、葵ちゃんどすいぶん、たのしげだつたね」

「そんな事はないのじゅ」

明久は『美少女秀吉』が葵と仲良くしている事が気になつたよう秀吉に言つと秀吉は苦笑いを浮かべて否定する。

「まあ、この面子じや、俺とアキを抜かせば、次に会つてるのは秀吉だしな」

「確かにやつですね」

理音は明久の言葉にくだらないと言いたげに言つと葵は苦笑いを浮かべて、理音の言葉に頷く。

「やつだね。やつぱり、女の子は女の子同士、楽しく話しあしなきや」

「明久、何度も言わせるでない。ワシは男じゅ……」

「えつー?」

明久はそれでも秀吉を女の子扱いすると秀吉は声を上げて否定するが、その言葉に葵は驚きの声をあげる。

「……本宮、見ればわかるだろ」

「や、そうですね。木下くんは男子の制服着てますし」

「それ以外では気づいて貰えんのかのう」

葵は慌てて言つと、秀吉はその言葉に落ち込むと、

「や、それにお姉さんとそつくりだから、双子の美人姉妹だと」

「本宮、フォローになつてないぞ」

「す、すいませんー?」

葵は慌ててフォローしようとするがフォローになつておらず、理音が突っ込みを入れると葵は秀吉に向かい全力で頭を下げる。

第27問

「……やつときたな」

「すいません。10人なんですけど、席空いてますか?」

雄一は理音達が店についたのを見て、安堵のため息を吐くが理音はお約束だと言いたげに店員に他の席へと案内して貰おうとするが、

「……理音、いい加減にしなさい。すいません。先に2名、きているんですけど」

優子はため息を吐きながら、理音を止めると雄一と翔子に会流する。

「優子、せっかく、俺が坂本夫妻を2人つきりにしてやるのとしているのに」

「あんたの場合は代表と坂本君で遊ぼうとしているだけでしょう」

理音と優子が言い合いを始めているなか、

「これで全員そろったな」

「……雄一、場所移動は許さない」

雄一は人数が集まつたため、翔子の近くから離れようとするが、当然、翔子に捕まり、後からきたメンバーが適当に席につき、メニューを選んだ後、

「えーと、木下くん、本当にすいませんでした」

「良いのじゃ。どうせ、ワシは男らしくなどないのじゃ」

先ほどの秀吉が女の子だと囁ひ發言を引つ張つてゐる葵と秀吉の姿がある。

「理音、あの2人はどうしたんだ？」

「ん？ 例の」とく、秀吉が本宮に女と間違えられただけだ

「またか」

雄一は怜生が近くにいれば翔子からの過剰な愛情表現が抑えられるためか、理音と怜生を同じテーブルに誘つたため、今は理音、怜生、雄一、優子、翔子の5人で1つのテーブルを囲んでいる。

「秀吉の容姿のせいもあるが、あいつは演劇部で女役もするからな。勘違いする人間は多いだろうしな」

「まったくだ。それに秀吉が自分は男だと言つても聞き入れないやツらばかりだしな」

「まあ、ヘタな女より、かわいい上に天然なところがあるからな。そこも勘違いされる原因だ」

理音と雄一が苦笑いを浮かべているなか、

「……お姉ちゃん、どうかしましたか？」

「！？ な、何でもないわ」

優子は自分より秀吉の方が男子生徒に人気があるのが気に入らないため、苦虫を噛み潰したような表情をすると怜生が心配そうに優子の顔を覗き込み、優子は慌てて何もないと言つ。

第27問（後書き）

どうも、作者です。

感想のユーザー指定を解除しました。忘れてました。
感想いただければ幸いです。

第28問（前書き）

2話更新です。

第28問

「もし言えば、葵ちゃん」

「どうかしましたか?」

葵の秀吉への謝罪も落ち着いたこと、明久が葵に声をかける。

「葵ちゃんはあれをまだ続けてるのかな? と思つて」

「……はい」

明久は葵の小説家になりたいと重い夢を思い出したよつて葵に聞くと彼女は恥ずかしそうに頷く。

「まだ続けてたのか? 今はどんなのを書いているんだ?」

「理音ー? あんた、いきなり、何をしてるのよ?」

葵の返事を聞いて、理音は葵の承諾も得ずしに彼女のカバンをあさり始め、優子は理音を止めるが、理音は優子では止められないが、

「……お兄ちゃん、他人のものを勝手にいじるのは良くないと思います」

「……」

怜生の一言で理音は止まる。

「前田も怜生くんにはかなわないわね」

「そうですね。あの、葵ちゃん、前田くんが書いてると言つてしまつたけど」

「あ、あの」

理音の様子に瑞希と美波は苦笑いを浮かべた後、瑞希が遠慮がちに葵に聞くと彼女は恥ずかしそうに目を伏せる。

「別に恥ずかじがる事じゃないだろ。まだ続けてるって事はちやんと前に進んでるんだからな」

「ど、言つて事で葵ちゃん、見せて」

「……前田くんも吉井くんも本気で言つてます?」

「当然だな」

「うん」

理音はカバンをあさる事をあきらめて、葵に言つと明久が続き、葵は恥ずかしいため、断ろいつとすると、2人が引くわけがない。

「む、無理です!？」

「誰にも見せないからね」

「つれです。吉井くんの目は誰かに見せて、笑いつもりだって目をします!？」

「そんな事ないよ」

葵はテンパつてきたようで慌てて嫌がるが明久は引かない。

「理音、本宮は何を書いてるんだ？ 小説か？ 絵か？」

「小説。ガキの頃からの夢なんだ。それが原因で俺とアキは本宮と仲良くなつたんだしな」

雄一は明久と葵の様子に葵いじりを止めた理音に聞くと理音は葵が隠そうとしていた事を隠すことなく答える。

「小説？ スゴいね。ボクにも見せてよ」

「わたしもみたいです」

「ダ、ダメです！？ 恥ずかしいです」

理音の言葉に瑞希と愛子が葵に見せて欲しいと言つと葵はカバンを抱きしめて小さくなる。

「……明久、姫路、工藤もそれくらいにするのじゃ。本宮が本氣で嫌がつておるのじゃ」

秀吉は葵の様子を見かねて止めに入るが、

「本宮、趣味じゃなくて今も本氣で目指しているなら、今じゃなくて良いから見せろ。今回はいきなりすぎたしな」

「そ、そ、そ、そ。ボクもリオも小学生の時から葵ちゃんの小説のファンなんだからね」

「は、はい。「めんなさい。取り乱しました」

理音と明久はからかつてゐるつもりは本当になかつたようで、葵に向かい落ち着いたら見せてくれと言つと、葵は2人の言葉に落ち着きを取り戻したようで頷く。

「しかし、理音と明久が読みたがるなら面白いんだよな。俺にも見せてくれよ」

「……雄一が読むなら、私も読む」

「……………明久がマンガ以外を読みたがるのは意外」

「そうね」

理音と明久の様子に葵の小説を読んでみたいと言ひ声が上がり、

「む、無理ですぅ」

葵は再度、テンパる。

第29問

「…………」

「…………ああ、なんか。すまん」

葵は周りからの言葉に押しつぶされたようでもうべくなり、理音に向めしぞうな視線を送ると理音は何となく謝る。

「…………やるわね。あの、前田に謝りむなんて」

「…………初めてみた」

理音が謝る様子に美波と康太は驚きの声を上げると、

「いやあ。ボクが言いつのも何だけど、葵ちゃんもリオも変わらないなあ」

「わつなんですか？」

明久は葵と理音の様子を見て、昔を懐かしむよつて言ひて、瑞希は明久に聞き返す。

「…………理音、お主、以前から、本當をからかつておつたのか？」

「そんなんつもりはないんだが、基本的に俺はドガ付くへらこのサディストだから、こういう反応をされるといじめ抜きたくなるんだが

…………」

「リオは葵ちゃん相手だとビンが甘いか……ぐほつー?」

秀吉はため息を吐きながら理音に向かい言つと、理音は苦笑いを浮かべ、そんな理音の様子に明久は理音をからかいつゝと明久の口には定番になりかけている栄養剤が投入される。

「……ふーん。理音はずいぶんと『本宮わんにだけ』は優しいのね」「ダメだよ。優子、前田くんに『あたしはいじめて欲しい』って言わない?」

優子は葵、理音、明久の会話を聞いて、少し不機嫌そうに言つと、愛子がニヤニヤと笑いながら優子に耳打ちをする。

「愛子、そんなんじゃないわよー?」

「そんなのって、どんなのかな?」

優子は全力で否定するが、愛子はそんな優子の様子を見て、楽しそうに笑う。

「……なあ、秀吉、明久も姫路もそうだが、理音に本宮とあいつらの卒業した小学校は『天然』を作ると言つ特殊なカリキュラムでもあるのか?」

「……何とも言えんのじゃ?」

「雄一」と秀吉はため息を吐く。

「わけのわからん事を言つたな……ん? 店も混んできたな。そもそも

ろ、解散するか？」

「そうね。ウチもあんまり、葉月を1人にさせるわけには行かないから、そろそろ、お開きにしない」

理音は店が混んできたのを見て解散するように言いつと美波も同意すると、全員が納得して解散となる。

第30問

「それじゃあ、葵ちゃん、帰らつか？」

「はい……あれ？ 前田くんと怜生くんは」

喫茶店から出ると明久は葵と近所に住んでいたため、帰らつと葵を誘つと葵は理音と怜生が自分とは帰る方向が違うのに首を傾げる。

「ああ。言つてなかつたな。俺は今は昔、遊んだ洋館に住んでる」

「……洋館？ って、あのお化け屋敷ですかー？」

理音は葵に向かい今の家の事を話すと葵は昔、理音と明久に連れて行かれた事があるよつて顔を青くする。

「……お主達は昔、本宮に何をしたのじや？」

「別に何もしていない。本宮が勝手に驚いてただけだ」

「まあ、女の子にはちよつと、怖かつたかもね」

秀吉は葵の様子に理音と明久が葵をからかっていたと思つたようでジト目で見ると、理音と明久は何もしていないと言つ。

「まあ、電気もきちんと通したし、幽霊なんか非科学的なものでないから、そのうち遊びにこい」

「良いんですか？ わたしなんかを誘つて？」

理音は葵の様子にため息を吐きながらも家に遊びに来ること頗りと葵は理音の言葉に驚いたよつできょとんとした表情で聞き返す。

「当たり前だ」

「わうわう。リオの家は広いし、快適だからね……眠れなあれば『…………眠？』

「……理音、お前、結局、設置したのか？」

理音は葵が聞き返す意味がわからないと黙り明久も理音に同意しながらも理音が家に仕掛けてくる眠に葵がかかる事を心配し、雄一は明久の言葉にため息を吐く。

「眠はロマンだら

「…………はー」

雄一のため息に理音は平然と云い切ると怜生は理音の言葉に頷く。

「…………あんまり似てない兄弟だと思つたけど、前田くんと怜生くんつて似てるね」

「…………そつなのよ。困った事にね」

怜子は怜生が理音の言葉に頷くのを見て苦笑いを浮かべると優子はため息を吐き、

「優子も大変だね。怜生くんの教育方針は前田くんに任せたばかりじゃダメだよ」

「……優子がしっかりと怜生くんの教育計画を立てるべし」

「代表も優子も何を言つてるんですかーー？」

「愛子と翔子は優子をからかいだす。

「木下さん、そうですよ。そして、わたし達が子供を育てるようになつた時にどうこう風にすれば良いか。教えてください」

「……雄一、わたしも子供が欲しい」

「翔子、わけのわからん事を言つな！？ 理音とがきんちょは兄弟だ！？」

瑞希のなかではすでに理音と優子は夫婦と認識され始めているようで優子につかみかかるように言つと翔子は雄一に迫り、雄一は翔子から逃げだし、翔子は雄一を追いかけて行く。

「……あはは。なんか、勝手に解散始まつたけど、どうしようつか？」

「まあ、良いだろ。俺と同じ方向のは

「ボクかな？ 怜生くん、一緒に帰ろう」

「……はい」

愛子は雄一と翔子の様子に苦笑いを浮かべると理音は今度こそ解散

だと言ひ、解散する。

第31問

「……あの、前田くんか、吉井くんを」

翌日、葵は理音と明久の言葉に完結まで書き上げた小説を持ってFクラスの教室を覗くと、

「葵ちゃん、ビーフ……」

「「「異端者には死の鉄槌を！！」」

「えつー？　えつー？」

明久は葵に気づき、廊下まで行こうとするが怪しい覆面集団に捕まり、教室に立てられた巨大な十字架に張り付けられて行き、葵は意味がわからずに戸惑ったような表情をする。

「……本宮、すまんのじや」

「木下くん、吉井くんはどうして、張り付けられいるんですか？」

秀吉はどうしたら良いのかわからなくなっている葵に声をかけると葵は疑問に持つていて今の状況を秀吉に聞く。

「……と云つわけなのじや」

「えーと、FF-F團ですか」

秀吉は葵に明久を拉致していくた集団の事を説明すると葵は苦笑い

を浮かべる。

「でも、女の子と話しただけで、制裁の対象なら、木下くんも危ないんじゃないですか？」

「ワシは大丈夫じゃ。困った事に何度も言つてもあ奴らはワシを男扱いせぬのじや」

「そうなんですか」

葵は自分も間違えていたため、FFF団が秀吉を女の子扱いすると聞いて苦笑いを浮かべるなか、秀吉は落ち込んでいるようである。

「大丈夫ですよ。前田くんや坂本くんみたいに木下くんを男性と扱っている人もいますし、木下くんはちょっと線が細いんですけど、立派に男の子です」

「ありがとうなのじや。『氣を使つてくれてるとは言へ、嬉しいのじや』

「…？」

最近では瑞希や美波と言つた女子生徒からも秀吉を女の子扱いするため、葵の言葉に秀吉は嬉しいようで笑顔を見せるとかわいすぎる秀吉の笑顔に葵は驚き、秀吉から視線を逸らす。

「本當、お主、びつかしたのか？」

「い、いえ、何でもないです。『氣にしないでください！？……ふえ！？』

「おつと、本富。危ないぞ」

「……本富、お前は何がしたいんだ？」

秀吉は葵が視線を逸らした意味がわからず、葵を心配するように彼女の顔を覗き込むと葵は慌てて、秀吉から距離を取った時に教室に戻ってきた理音と雄一にぶつかり、反動で秀吉の方に戻つて行く。

「本富、ケガはないじゃねつな？」

「は、はい。木下くん？……ふしゅううう」

秀吉は葵を抱き止めた形で床に腰を下ろしながら、葵を心配すると、彼女は田の前にある秀吉の顔を見て、顔を真っ赤に染めて氣を失つ。

「本富、お井、じつしたのじゅー？」

「……オーバーヒートだな」

「免疫なさやうだからな。それに、あの距離だしな」

秀吉は慌てて葵の体を揺するが彼女は反応する事なく、葵の様子を見て、理音と雄一はため息を吐く。

第32問

(……あれ? いじって、保健室?)

葵は気を失った後、保健室に運ばれ、目を覚ました葵は状況がつかめず、首を傾げる。

「本富、田を覚ましたよ! じやな」

「さ、木下くん! ? わ、私、どうして保健室にいるんで……! ?
ど、どうして、木下くんがそれを! ?」

葵の寝ていたベッドの横には秀吉が座つてあり、葵は秀吉に今の状況を聞こうとするが秀吉は葵の書いた小説を読んでおり、葵は慌てて秀吉に言ひつい。

「ワシのせいで、本富が気を失ったからね。起きるまでそばにいると言つたら、理音と明久が貸してくれたのじや。本富に承諾も得ずに読んだ事は謝るのじや。すまんのじや」

「木下くん! ? 頭を上げてください! ?」

秀吉は葵に許可も取らずに、自分の好奇心を優先して小説を読みてしまった事を謝ると葵は秀吉の様子に申し訳なくなつたのか、秀吉に頭を下げる。

「……本富、頭を上げてくれぬか? ワシが悪いのじやから、お主が謝る理由がないのじや」

「そ、そうですね」

秀吉は葵の様子に苦笑いを浮かべると葵は落ち着いたよじで頭をあげる。

「あ、あの、木下くん……」

葵は秀吉が自分の小説を読んでいたため、感想を聞きたいが言い出せずにはいる

「理音や明久がファンだと云つておつた意味がわかったのじゃ。まだ、途中までしか読んでおらんのじゃが、本当に面白いのじゃ」

秀吉は葵の様子に彼女が何を期待しているか理解したよじで葵の小説を読んだ感想を素直に言つ。

「本当ですか？」

「本当なのじゃ。ワシは演劇部でのう。演技の練習のために台本や小説はたくさん読むのじゃが、ここまで、話に引き込まれたのは久しぶりなのじゃ。本宮は才能があるのじゃ……！？ も、本宮、どうして泣くのじゃ！？ 何かワシはおかしな事を言つたかのう？」

葵は秀吉の言葉に聞き返すと秀吉は先ほどの言葉に嘘はないと言つと、葵は秀吉の言葉がよほど、嬉しかったよつてボロボロと涙を流して喜ぶが秀吉はそんな葵の様子を見て慌てる。

「木下くんは悪くないです。木下くんが私の小説を誉めてくれたから、嬉しいくて……今まで、前田くんと吉井くん以外の人は私の小説を読んでも、そんな事を言つてくれなかつたから、私には才能なん

かないって、夢ばかり見て現実も見れないバカ女だつて

「そんな事はないのじや。ワシも明久も理音も本富の小説は面白いと思つたのじや！－ それに才能がないと言われても諦めきれないのじやる。少なくともワシは本富に才能はあると思ひのじや」

葵は今までに自分の小説を読んだ人間の悪意に傷をおつてこりのうで、ボロボロと大粒の涙を見せながら言つと秀吉は心から思つているようで彼女に向かい微笑みかける。

「ワシは思つたのじや。本富のように純粹に夢を追いかけている人間は周りはつらやましく思つたのじや。自分にはそこまで真剣に打ち込めるものがないから、だから、邪魔をしてしまつたのじや」

「……」

「誰もが本富のように真つ直ぐには進めんのじや。だから……」

「木下くん、ありがと、いやこまゆ」

秀吉は葵を励ますと葵は秀吉の心つがいが嬉しかつたようだ笑顔を見せる。

「わ、わかってくれれば良いのじや」

秀吉は葵の笑顔に照れたのか少し顔を赤くして葵から視線を逸らすと、

「本富、そろそろ、帰るのじや。下校時間も近いしのう」

「えつー!? もうそんな時間なんですかー!?

葵は下校しようとすると葵は慌てて時間を確認すると秀吉の言つ通りの時間である。

「わ、私、鞄を取つてこなことー!」

「待つのじや。鞄なら、ここにあるのじやー!」

「……どうしてですか?」

「……放課後になつてすぐに理音が取つてきたのじや

「……前田へんりしこですね」

「ナハハのナハ」

葵は秀吉と顔を合わせて苦笑いを浮かべるといへんで下校する。

第33問

「あの……」

「あつー? 葵、隠れてないでへつてきなさいよ」

葵は昨日の事を理音と明久に謝るついでクラスの教室を覗くと葵を見つけた美波が手招きをする。

「えーと、良いんですか?」

「気にしないの。入ってきなよ」

「はい」

葵は遠慮がちに言いつと美波と瑞希が葵を呼び、

「お邪魔します」

葵は遠慮しながら、Fクラスの教室に入る。

「あの。昨日は眞也んに迷惑をかけたみたいでいいませんでした」

「良いいのよ。元々はアキが悪いんですよ」

「葵ちゃんは悪く無いですよ。それに私達は誰も気にしませんでしたら、それより」

葵は瑞希と美波に昨日、教室で倒れた事を謝ると2人は気にする事

はないといつて。

「それより?」

「「「」」の続きはないの?」」

葵は2人の様子に首を傾げると瑞希と美波も葵の小説を理音と明久から勝手に借りていたようで興奮氣味に叫ぶ。

「えーと?」

「あつたら、読ませてください」

「ウチは日本語がまだ読めないから、昨日、前田に1冊、ドイツ語に訳して貰ったの。日本語の本はウチ読めないから、あまり読まなかつたんだけど、葵の小説、凄く続きが気になるのよ」

葵は状況がつかめず首を傾げると理音と明久は葵の小説を布教に入っているようで瑞希と美波だけでなく、他のFクラスの生徒からも下心はありそうだが、同じように葵の小説の続きを読みたいと言う声が響く。

「な、な、何で、皆さんがそれを…?」

「前田とアキ、木下が面白いつて言つから読ませて貰った」

「はい」

「……」

瑞希と美波は小説の続きを期待した視線で見たまま言つと葵の顔は
みるみるうちに真っ赤に染まり、

「葵ちゃんーー？」

「葵、どこに行くのよーー？」

恥ずかしくなつたようで全力で下クラスの教室から逃げ出す。

第3・4問

「本宮…？」

「……また逃げたか」

葵が教室から逃げ出したのを見て、理音は冷静に葵を見送るが秀吉は葵の様子を見て慌てている。

「理音、お主はじつしてそんなに冷静なのじゃー!?」

「昔からだからな。プレッシャーに負けると逃げ出すんだ。本宮の書く物語は面白いが自分に自信がないから、評価をされそうになると逃げ出すんだ」

秀吉は理音に葵の事を聞くと理音は表情を変える事なく答える。

「やうなの?」

「悪い事をしてしまいましたか?」

理音と秀吉の様子を見て、瑞希と美波が声をかけるが、

「そんな事はないだろ。お前らは本宮の物語を正面に評価しようとしました。あいつはそのプレッシャーに負けただけだ」

理音は冷静な口調で言つ。

「自信の問題ですか。私は少しあかる気がします」

「精神的な問題は難しいの?」

瑞希は自分と葵を重ね合わせてこんなよつで小さな声で言つと秀吉は困つたよつて笑つ。

「……まったくだな。俺は本宮は才能があると思つし、そのまま書き続けて欲しいとは思うが悪い感想を受ければ直ぐに逃げ出しちゃだからな」

「それは小説家にはなれないって事?」

理音はため息を吐きながら言つと美波は心配やつた表情をする。

「……あいつしだいだら」

「それは冷たくない? 前田、じうじかできなーの」

「後は荒療治ならやり方はあるが……」

「……荒療治。理音、本宮の事はワシに任せてくれんかの?」

「ああ。お前が適任だる。任せぬよ」

理音には考えがあるよつて言つと秀吉は自分でやらせて欲しいと言つ。

第35問

「荒療治？ って、前田、木下、何をするつも？」

「やり方ならいくらでもあるだろ。あいつはそれを書いた人間だ」

「これですか？」

美波は理音と秀吉に何をする気かと聞くと理音は瑞希が持っている葵の小説を指差す。

「これをどうするの？」

「それを使うと書るのは直接的すぎるのじゃが、本宮は話を書くのが好きなのじや、それを披露させるのじや」

「じつひせうじ？」

「演劇部が公演をする予定があるので。その脚本や演出を手伝つて貰おうと思つのじや」

秀吉は演劇部の手伝いを葵にさせると笑う。

「でも」

「こちなりすぎない？」

「あいつは自信がない上に、人と関わるのが苦手だからな。少しずつでも人にかかりを持たせるのが重要だからな……つたぐ、カウ

ンセリング関係は本職じゃないんだ。めんどりだな

「やつ言いながらも理音は本宮の力になるのじゃねえ。」

瑞希と美波は心配そうな表情で言つが理音はため息を吐くが秀吉はそんな理音を見て優しく微笑む。

「……む、」

「確かにね。前田、ウチも手伝つから葵の事、頼むわよ」

「はい。わたしも手伝います」

理音は秀吉の言葉にバツが悪そつたな顔をすると瑞希と美波も葵の手助けをすると呟つ。

「……ああ。男の俺や木下じや助けられない部分もあるからな。そ
こは任せぬ」

「やつじやのひ」

「木下、何を言つてゐるのよ。あんたもこいつ側でしょ」

「島田、ワシは男じや」

理音は2人に葵のフォローを任せると美波も秀吉を同性と扱つており、秀吉は落ち込んだようで肩を落とすが瑞希と美波は秀吉が落ち込んでいる意味がわからないようで首を傾げている。

「……いや、秀吉には頼みたい事があるから、そっちからは外して

くれ

「そりなんですか？」

理音は明久達クラスメート男子だけでなく瑞希と美波にまで女性扱いされている秀吉の様子に苦笑いを浮かべて言つと、瑞希は首を傾げる。

「ああ。本宮の苦手を治すのは秀吉が適役だからな」

理音は何かを企んでいるようで邪悪な笑みを浮かべると、

「……葵、大丈夫よね？」

「だ、大丈夫だと思いますよ」

「……心配になってきたのじゅ」

理音の様子を見て、3人は一抹の不安を覚える。

第36問

(……本宮はいるかのう?)

秀吉は帰りのHRを終えると葵を訪ねるためにBクラスの教室を覗くが、

(……いないようじやな。それなら、根本に見つかる前に退散するかのう)

教室には葵の姿はなく、秀吉は教室から離れようとすると、

「木下? Fクラスが俺達、Bクラスに何のようだ?」

一番会いたくなかったBクラスの代表『根本 恭一』に見つかる。

「根本か? 友人を訪ねにきただけじゃ」

「友人? ……本宮なら、今日は中庭の掃除だ」

秀吉は恭一の顔をあまり見ていたくもないため、すぐにこの場から離れようとすると恭一の口からは秀吉が葵を探してると書いて当てる。

「根本、なぜ、お主が?」

「お前と前田は友人だろ。後は昨日、前田が本宮のカバンを取りに来たからな。誰でもわかるだろ」

秀吉は恭一の言葉に首を傾げると恭一はぐだらない事を言つなど言

「う」と、

「そつそと行け。俺以外にもFクラスを敵視してゐるヤツは多い。昨日は前田、今日はお前となると騒ぎ出す」

不機嫌そつこに秀吉を追い払つよつて言ひ。

「お主に何があつたかはわからぬが、ありがとうなのじや。行ってみるのじや」

「お前に礼を言われる筋合いはないね。他に用がないなら、そつそと行け」

秀吉は恭一に頭を下げる。恭一は素直に礼を言われなれていないのか秀吉から視線を逸らすと秀吉を追い払つよつて手を振る。

(……ふむ。理音と根本は知り合いなのじやううか? 機会があれば聞いて見るかのう)

秀吉は恭一の様子に苦笑いを浮かべた後、恭一から聞いた葵がいるであらう中庭に急ぐ。

第37問

(……また、わたし1人か)

葵は今日も一人で掃除をしており、自分1人に掃除を押し付けるクラスマートに何も言えない自分が情けなくて目から涙が溢れ出た時、

「いたのじや。根本に礼を言わんといけんのう」

「木下くん?」

秀吉が葵を見つけ駆け寄ってきて、葵は秀吉が自分を探していた意味がわからないが泣いている姿を見られたくないため、慌てて涙を拭く。

「……本宮、お主、泣いておったのか?」

「な、何をいきなり言つてるんですか?」

秀吉は葵の様子を見て言つと葵は笑顔を見せると、頬には拭ききれなかつた涙が残っている。

「……やれやれなのじや。理音や明久が言つ通り、お主はわかりやすいのじや」

「あ、木下くん!?

秀吉は葵が嘘を吐いている事がわかると言つと制服のポケットからハンカチを取り出して、葵の涙を拭き、葵は秀吉のいきなりの行動

に慌てて一歩下がる。

「本富、ワシも掃除を手伝つのじゃ」

「木下くん、ダメですよ。」の前も手伝つていただきましたし

秀吉は葵の様子に苦笑いを浮かべて掃除を手伝つと葵は申し訳ないと呟つが、

「気にするでない。まあ、本当の事を言つとワシは本富に頼みたい事が有つたのじゃ。掃除を手伝つ代わりにそれをきいてくれんかのう」

秀吉は葵に手伝つて欲しい事があり、交換条件だと呟つ。

「頼み事ですか？ わたしにできる事なら構いませんけど」

「本富にじか頼めんのじゃ。それでは交渉成立したよじやし、片付けるかのう」

葵は内容も聞かずじきに頷くと秀吉は笑顔を見せて、掃除を終わらせようとしたが、

「は、はー。よひじくお願つします」

葵は秀吉に頭を下げる。

第38問

「木下くん、ありがとうございました」

「頭をあげるのじゃ」

中庭の掃除を終えると葵は秀吉に深々と頭を下げる。秀吉は苦笑いを浮かべる。

「それで、今日は時間は問題ないのかのう」

「は、はい。私は予定なんかありませんから……」

「……落ち込むのなら、自分で言ひでなさいのじゃ」

葵は遊ぶ友人などいないと言い、落ち込みだし、秀吉は苦笑いを浮かべたまま言ひ。

「……はい。それで木下くんの頼み事つて何ですか?」

「つむ。歩きながら話すから、付いてきて欲しいのじゃ」

「はい」

秀吉は葵に付いてくれと囁くと葵は秀吉から一メートル後ろを付いて追いかけてくる。

「……本宮、距離をとらないでくれんかのう。話難いのじゃ

「「」「」ぬさんせこーー?」

秀吉は葵に並んで歩くようついひと葵は慌てて秀吉の横に並ぶと、

「それで、木下くん、わたしに頼みたい事ついて書つのは」

「つむ。話したかも知れんのじゃが、ワシは演劇部に所属しておつてのう」

「はー。演劇部のホープだつて聞いて……」

葵は秀吉の話に何かに気づいたようで顔は血の気が引いたように真っ青になつてこき、

「無理! ? 無理です! ?」

秀吉が頼み事を切り出す前に逃げ出さうとするが、

「待つのじゃ」

秀吉は逃げ出さうとする葵の腕をがつちつとつかむ。

「ワシは本富の小説を読んで感動したのじゃ。演劇部のメンバーはワシと同じで演技には自信があるのじゃが、脚本は苦手なのじゃ。本富の力を貸して欲しいのじゃ」

「無理です。……わたしには荷が重すぎます」

秀吉は葵に頭を下げるが葵は秀吉が手を放してくれないため、廊下にへたり込み泣き始める。

「別に本宮一人に押し付けようとは思つてないのじや。力を貸して欲しいのじや。清涼祭は演劇部の晴れ舞台なのじや」

「で、ですけど、それをわたしのせいでも無しにあるわけには」

秀吉は葵に協力して欲しいと言つが葵は絶対に無理だと言つ。

「……のう。本宮よ。お主の夢は小説家なのじや？」

「……はー」

「ワシは周りからバカにされるかも知れんが演劇で食べて行きたいと思つておる。姉上には無理だと否定されておるがそれでも、ワシの夢じや、諦めたくないのじや。夢に向かつて歩くのは険しい道を歩かねばならぬ。傷つき倒れてしまつ事もあるかも知れぬ。じゃが、ワシは諦めたくないのじや」

「……」

秀吉は優しく笑みを浮かべて葵に聞かせるように呟つ。

第39問

「本面、お主をワシと回じ夢を志す者として頼むのじゃ。今すぐとは言わぬ。その代わり、せめて、ワシがどれだけ本気か見てくれんかのう。ワシだけじゃない。少なくともうちの演劇部はみな、ワシと回じ夢を持つて進んでおる」

秀吉は葵をまっすぐに見て言ひつと、

「……わかりました。見るだけなり」

葵はどれだけ秀吉が本気か理解したよつで小さな声で返事をする。

「それなら、急ぐのじゃ、みなは先に練習を始めておるのじゃ」

「や、木下くん！？ 手、手！？」

秀吉は葵の返事を聞き、嬉しそうに額くと葵の手を取り駆け出やつとし、葵はいきなり秀吉に手をつかまれた事で顔を真っ赤にするべく、

「す、すまんのじゃー！？」

秀吉は慌てて、葵の手をつかんでいた手を放し、

「悪かったのじゃ」

「い、いえ、気にしないでください」

2人で顔を真っ赤にして頭を下げあつた後、2人で演劇部の練習場

所に歩き出す。

「……あこつらは付き合って始めた。カップルか？」

「そう言つたな。根本、本宮は奥手だしな。秀吉は基本的に女から同性扱いされてるから、免疫がないんだろ」

2人の姿を見かけた恭一はため息を吐くと理音は表情を変える事なく言つた。

「……前田、お前、自分の恋愛には鈍感なのに、他のは氣づくんだな」

「あの2人がわかりやすいだけだる。だいたい俺は鈍くはない」

恭一は理音と知り合つた時の事を思い出してため息を吐くが理音は表情を変える事なく言い、

「それで、勉強を教えるのは構わんが俺の家で良いのか？」

恭一は召喚大会で優勝するために理音を利用しようとしているのか理音に勉強を教えてくれと頼んでいたようで理音は自分の家で良いかと聞くと、

「家？ 良いのか？」

「ああ、俺は弟を迎えて行かないといけないしな。少し用事もあるから、7時過ぎにここに来てくれ」

「なら、頼む」

恭一は理音の答えに驚きながら返事をすると理音は恭一にメモを渡すと2人は歩き出す。

第40問

「……凄い」

葵は秀吉達演劇部の練習を見て声を漏らす。

(……木下くんがどれだけ本気かわかるよ。私はどうしたいのかな
?)

葵は秀吉がどれだけ真剣に演技をしているかわかつたようで自分は秀吉ほど真剣に向かっているかわからないようで顔を伏せる。

「本宮、ワシらの演技はどうじゅった?」

「す、すじかったです。皆さんがどれだけ真剣で……」

秀吉が笑顔で駆け寄つてみると葵は自分がどれだけ夢を甘く見ていたかを知り、目から涙が溢れ出す。

「本宮ー? ど、どうしたのじゃー?..」

『木下、何、泣かせてるんだよ』

秀吉は葵の様子に慌てると演劇部員から葵と秀吉を冷やかす声が聞こえ、

「な、何でもないです。ちよつと、すいません」

「本宮、待つのじゃー?..」

葵はこの場から1人で逃げ出し、秀吉は葵の後を追いかける。

『なあ、あれはフラグか?』

『だらうな。あれだけ、可愛くても木下は男だつたわけだな』

『……木下が女と付き合ひだしたら、うちの学園、暴動が起きるんじゃないかな?』

『……ありえる』

葵と秀吉が出て行く姿を見た演劇部員達は彼らなりの言葉で葵と秀吉の背中を生暖かい目で見つめていた。

第41問

「本宮、捕まえたのじゅ」

「……」

「どうして逃げたのじゅ？」

秀吉は葵を捕まえると逃げ出した理由を聞く。

「……木下くんや演劇部の皆さんがまぶしかったんです。私が持つてないものを持っていてつらやましかったんですね」

「どうして事じゅ？」

葵は秀吉には仲間がいて一緒に夢に向かって切磋琢磨しているのに対しても自分は一人だと言つが秀吉は意味がわからずには首を傾げる。

「すいません。私に演劇部で手伝える事はないです」

「どうしてじゅ？」

葵は秀吉に頭を下さると逃げ出さうとするが、秀吉は納得していないため、葵から手を放さない。

「放してすぐだぞ」

「いやじゅ。納得いく説明をして欲しいのじゅ」

秀吉は葵の顔をまっすぐに見つめて言つと、

「わ、私は最低です……木下くんは私に力を貸してくれって言つた時、恥ずかしいと言つ気持ちの他に必要とされて嬉しかったんです。今まで、私にはそんな風に言つてくれる人は居なかつたから」

「……」

「でも、木下くん達の演技を見て、私が入り込むところなんてなかつたんです」

「そんな事はないのじや」

葵は演劇部には自分が入り込む隙間がないと言つが秀吉はそんな事はないと言つが、

「ありますよ。私にはそう見えました。そして、私はやつぱり1人なんですね」

葵は悲しそうに笑つた時、

「本宮は1人なんかではないのじや……」

「さ、木下くん？」

秀吉は声を少し大きくして葵を叱るように言つて、葵は秀吉の様子に驚いた表情をする。

第42問

「なぜ、1人だと言つのじゃ。明久も理音もお主を仲間じやと言つておつたのじゃぞ。明久は直ぐには気づかなかつたが、理音は4年も離れていたお主をすぐに見つけたのじゃ。そんな理音を、お主は仲間じやと言わずに自分は1人だと言つつもりか？」

「それは……」

秀吉は葵の自分は1人だと言つて葉に納得が行かずには声をあげると葵は秀吉から目を逸らすと、

「……木下くんにはわかりません」

目に涙を溜めて消えてしまって、そつなほどの小さな声で言つ。

「何がじや？」

「木下くんは私と違つてたくさんものを持ってます。私は何も持つてないんです」

秀吉は葵に聞き返すと葵は自分には何もないと言つ。

「何を言つておるのじゃ、お主には小説家と言つ夢が？」

「小説家が夢？ それが本当に自分の夢だと言えるかも自信がないんです。ただ、自分に何もないと認めたくないから言つてるだけです。何もない空っぽの自分が書いたものでも面白いって言つてくれた人がいたから、その人の優しさに甘えていただけなんです。私に

「何もないんです」

「本宮！？」

秀吉は葵の様子に顔を覗き込むと葵は自分の夢は口だけだと言い、崩れ落ちそうになり、秀吉はそんな葵を支えようとすると、

「木下くん？」

「うむ。やはり、ワシは力不足じやのう。理音に効率の良い筋トレ
メニューを作つて貰うかのう」

秀吉には葵を支えきれず、葵を抱き抱える形になってしまい、苦笑いを浮かべると、

「本宮には才能があるのじや。理音や明久だけじやなく、ワシも姫路や島田も本宮の小説を読んだみんなはそう思ったのじや」

一それは誰さんが優しいから

葵に言い聞かせるような優しい声で言うが葵は秀吉の言葉を否定しよつとする。

「誰も嘘などついておらんのじや。それにワシはどんな事であらうと自分の夢に妥協はしどうない。演劇部の仲間も一緒にのじや。ワシが演劇部の仲間に本宮に手伝いを頼みたいと言つた時、みなには本宮の小説を読んで貰つた。そうしたら、みな、納得してくれた。違つのう。本宮の本でやつてみたいと思つたのじや」

1

「お主は自分に自信がないと云ひ。それはお主自身が自分と向き合つてないからじゃ」

「それは……」

秀吉が葵は自分と向き合つ事から逃げると云ひと葵は頭を伏せる。

第43問

「勇気を持つて歩み出してみぬか?」

「でも」

秀吉は優しい笑みを浮かべて、葵に言つたが彼女は不安やうに頭を伏せる。

「本面だけじやないのじや。誰もが前に進むのは怖いのじや。ワシや演劇部の仲間達、それに理音だつてそつじや」

「前田くんはなこ氣がしますナビ」

葵は理音が不安に思つ事などないと言つたが、

「そんな事はないのじや」

秀吉は苦笑いを浮かべる。

「理音はたぶん、人より強るのが上手いだけじや、表情を崩さず何事も平然と行つておるよつて見えるがのう。怜生くんの事やワシは聞いてはおらぬのじやが、両親との事……不安などいひはきつとあるのじや」

「……」

「今はそれを明久が埋めてこむよつて見えてるのじや」

秀吉は表情を隠さずに向ひなす理音にも葵と回じ部分はあると言ひ。

「……そつかもせんね。でも、前田くんには吉井くんや木下くんがいます。私には」

「わの おも言ひたであらひ。明久や理音はお主の味方じや。ワシや雄一、マッシロー、姫路、島田、霧島、工藤も……姉上はわからんのじやが」

葵は明久や秀吉がいる理音がひりやましこと言ひて秀吉は葵を叱るやう言ひ。

「不安なら不安と聞ひのじや。聞ひてくれねば、ワシは相談にものじやれぬ。もつと、本題せ言ひたい事を言ひてよいのじや」

「木下くん、迷惑じやあつませんか？」

「友人の相談を迷惑などとは思わぬのじや」

秀吉の言葉に葵は不思議な表情をして聞くと秀吉は笑顔で言ひ切
り、

「辛くなつたら、ワシが本題を取れるのじや。だから、ワシとどもに進んでみぬか？」

葵に向かって手を差し出すと、

「ふしゅううーー？」

ある意味、皆口にも取れる言葉で葵は顔から煙を上げる。

「 も、本音…？ どうしたのじゃ…？」

しかし、秀吉は葵がどうしていつなつたかわからず口走る。

第43問（後書き）

どうも、作者です。

葵、秀吉との接触で2度目の熱暴走（爆笑）

秀吉と葵は皆さんにどう思われてるんでしょう？

お似合い？ 秀吉には明久しか認めない？

第44問

(……「だったら良いものかのう？ 本宮の事じや、今日も一人で掃除をしておるのじやねん」)

「秀吉、何を悩んでるんだ？」

秀吉は葵から協力を得られたため、葵を迎えて行くが悩んでいると、理音が秀吉に声をかける。

「つむ。本宮に演劇部への協力して貢う事には成功したのじやが、本宮の事じや、今日も一人で掃除をさせられあると思つてのう」

「確かにな」

秀吉がため息を吐くと理音は頷き、

「なら、行くか？」

「どこのじや？」

「Bクラスに決まってるだろ」

「理音、待つのじや！？ ワシも行くのじや」

表情を変える事なく、当然のように葵を迎えて行くと言つて、一人で教室を出て行き、秀吉は慌てて理音を追いかける。

「それで、秀吉、本宮のは揉んだか？」

「お主はこきなり何を言つのじゃー?」

Bクラスの教室に向かう途中で、理音は突拍子もない事を秀吉に聞か、秀吉は顔を真っ赤にして理音を怒鳴りつける。

「……へタレ」

「わけのわからぬ事を言つでない。だいたい、本宮は……」

理音は秀吉の反応にため息を吐くと秀吉は葵が好きなのは理音だと言いかけるが、言葉を飲み込む。

「……秀吉、自分のなかにあるものを飲み込まずに素直に出したらどうだ?」

「な、何を言つておるのじや?」

理音は相変わらず、自分以外の恋愛感情には敏感なようでため息を吐くと秀吉は反論しよつと声をあげるが、

「やつやつて、お前は『木下 秀吉』を演じるつもりか? たまにはお前のなかにある自分を見せたらどうだ?」

理音は表情を変える事なく、秀吉に本心を見せると言つ。

「お主は句を詰つておるのじや?」

「……もつ少し、ワガママを言ふと言つ事だ。本宮は原石だ。研ぐだけ研いで、横からかゝるわれるなよ」

秀吉は理音の言葉の意味がわからないことについて理音はため息を吐き、

「本宮、こるか？」

「前田くん！？ 木下くん！？」

Bクラスの教室のドアを開けると葵はクラスメートに掃除を押し付けられそうになつてている。

「根本、本宮は掃除当番か？」

「いや、今日は違うな」

理音は恭一に葵が掃除当番かを確認し、恭一は葵は掃除当番ではないと答えると、

「行くぞ。秀吉」

「つむ」

「えつ！？ エツ！？ 前田くん！？ 木下くん！？ 何があつたんですか？」

理音と秀吉は葵を引きずつて歩き出し、葵は意味がわからないままで、2人に引かれられて演劇部に向かつ。

第45問

「結構、 れぬになつてゐるぢやないか」

「やうね……」

理音は一度、 学園長室で攻撃システムの調整をした後、 演劇部に様子を覗きに顔を出すと理音にひいてきた優子は不機嫌そうな表情で言つた。

「なんだ?」

「別に……なんで、 あたしがいるのにあなたはあの子の事を気にしてゐるよ?」

「なんだ? ヤキモチか」

「へ、 ひつせいわよ」

理音は表情を変える事なく、 優子に言つと図星を刺された優子は頬を膨らませると、

「本宮は俺が欠落してもそばにいてくれた。 数少ない友人なんだ。 たぶん、 アキとあいつが俺を見捨てていたら、 今、 俺は生きてはいない」

「特別なんだ」

「ああ」

理音は表情を変える事なく言つと、優子は自分の知らない理音を知つてゐる明久と葵に嫉妬しているよつて見える。

「……お前は俺を信用しないのか?」

「信用? だつて、あんた、あの子の胸は間違いなく好みでしょ?」

「ああ、もちろん、揉みたいが、あれを揉むとお前だけではなく、秀吉にも怒られるからな。止めておく」

優子は理音が『自他共に認める巨乳好き』のため、信用できないとジト目で睨むと理音は揉みたいと言う事は否定しない。

「……ねえ。なんで、秀吉が出てくるの?」

「お前はずつと秀吉のそばにいるのに気づかないのか?」

優子は理音の言葉に首を傾げるが、理音はため息を吐くと、

「一つ聞いて良いか? 優子、お前は秀吉の初恋の相手はわかるか?」

「ちよつと待つてね……咲井くんかな?」

優子に秀吉の初恋の事を聞くと優子はしばらく考えた後、明久だと言つ。

「……お前は自分の弟まで趣味の対象にするのか?」

「ちがつ！？ 違つわよ！？ 秀吉は吉井くんの前だと顔を赤くしたり、おかしな反応するからよ」

理音はため息を吐くと優子は慌てて否定する。

「まあ、秀吉の『反応』にも問題はあるが、基本的にあいつは女から異性として扱われなかつたから、あまり、そう言つのを考えないで生きてきたんだる。だから、自分を異性と見てくれる本音が特別に見えている」

「それって、秀吉があの子の事を好きになつてるつて事？」

理音の言葉に優子は驚いたような表情で言つと、

「だらうつな。自分の想いをすぐ『認めよつどしないあたり、双子だな』

理音は優子を見て、くすりと笑い、

「帰るぞ。怜生を迎えていかないといけないからな」

「へ、うん」

2人は並んで演劇部の部室を後にするが、秀吉と葵は真剣に取り組んでいるためか理音と優子に気づく事はない。

第46問

(もう、こんな時間、早く帰らなこと)

葵は演劇部の練習を終えて片付けを終わらせ、時間を確認するとすでにだいぶ遅い時間になつてゐるため、

「あ、あの」

「本町、少し待つていってくれんかのう。いきなり、演劇部を手伝わせたのでのう。遅い時間になつてしまつたし、ワシが家まで送るのじや」

近くにいる演劇部員に帰る事を伝えようと声をかけようと秀吉が葵に声をかける。

「えつ！？ えと、そんな、気にしないでください」

「ダメなのじや。明日からもこの時間になつてしまつからね。きちんと本町の御両親に話をせぬといひのじや」

葵は秀吉の言葉に慌てて断るが秀吉は葵が遅くなつた理由を説明しに行くと言つ。

「で、でも」

『木下、お前が送ると美少女が2人になるから、変質者に襲われるぞ』

「ワシは男じゃ…?」

葵は秀吉の善意を断りたいがキチンと言に出せずにいると他の演劇部員から茶々が入り、秀吉は演劇部員達とじゅれあい始め、

(……今のうちかな?)

葵は秀吉に何も言わずに逃げ出そうとした時、

「葵ちゃん、秀吉、部活は終わった? 一緒に帰らない?」

「良かった。まだ居てくれました」

ドアが開き、明久と瑞希が顔を出す。

「吉井くんに姫路さん? ビリして?」

「葵ちゃん、どうかした?」

2人の登場に葵が首を傾げると明久は葵に聞き返す。

「い、いえ。もう遅い時間なのにお2人はどうしたのかな? って

「私達は清涼祭でのクラスの出し物の準備ですよ。私の担当していた作業が遅れて、吉井くんと美波ちゃんに手伝つて貰つてました」

葵の疑問に瑞希は申し訳なしあつた表情をすると、

「やうなんですか?島田さんば?」

「美波なら、鉄人に今日の作業が終わつたって報告しに行つたよ。美波はうちのクラスの実行委員だから、で、校門前で待ち合わせ

「うむ。待たせてしまつたかのう？」

葵は美波の居場所を聞くと明久は美波と待ち合わせしていると話していると着替えを終えた秀吉が合流する。

「秀吉、お疲れさま」

「うむ。明久、姫路、すまんのう。ワシも手伝えれば良かつたんじやが」

「気にしないでよ。僕は副実行委員だしね。それに秀吉は演劇部があるんだからさ」

秀吉は自分がクラスの喫茶店を手伝えなかつた事を謝ると明久は笑顔で言い、

「それに、ちよつと前までリオと秀吉のお姉さんも手伝ってくれたしね。怜生くんを迎えて行かないといけない時間になつたから、先に帰つちやつたけど」

「姉上がか？ 珍しい事もあるものじや」

秀吉は優子がFクラスの喫茶店の準備を手伝つたと聞いて首を傾げるが、

『木下、本宮、そろそろ、鍵かけるから出てつてくれ』

演劇部部長から声をかけられ、

「歩きながら話しましょ、つか？」

「せうじやな

4人は美波と待ち合わせをしている校門前に向かう。

第47問

「葵、演劇部はどう?」

「あつ!? はい。えーと……」

美波と合流して下校途中で美波が葵に演劇部の事を聞くが葵は黙ってしまう。

「ねえ。アキ、ウチ、おかしな事を聞いた?」

「それは美波の狂暴性がこわ……あだだだ!? 胸がないから肋骨が!?」

「……」

明久は美波のお怒りを買い、関節技をかけはじめ、葵は2人の様子を見て顔を青くしている。

「島田、止めるのじゃ。見なれない人間はさすがにひくのじゃ」

「み、見なれないと、いつもなんですか?」

秀吉はため息を吐きながら美波をいさめると葵は明久がいつも美波に関節技をかけられている事を聞き、顔をひきつらせる。

「そうね。それで、木下、葵は演劇部に馴染めそう?」

「そうじやのう。ワシは馴染めておつたと思つのじゃ」

「そつか。良かつたわね」

美波は明久から手を放すと秀吉に葵の様子を聞き、秀吉が頷くと美波は嬉しそうに葵の肩を叩く。

「は、はい」

「……」

葵は美波の態度に緊張したように頷くと秀吉は葵の様子に眉間にシワを寄せると、

「秀吉、葵ちゃんはまだ馴染めてないんだね？」

「つむ。まだ2日目なのじや。仕方ないであります」

明久は葵と秀吉の様子に葵がまだなれてい無い事に気がつくと秀吉は小さく頷く。

「秀吉、何かあつたら、ボクにも教えて」

「つむ。明久、お主と聞こ、理音と聞こ。ずいぶんと本宮の事を気にしておるのう」

明久の言葉に秀吉は疑問に思つた事を口にすると、

「そりやあ、友達だからね」

「そつか」

明久は笑顔で言い切り、秀吉はそんな明久の様子に少しホッとする。

「アキ、木下、何してるのよ。行くわよ」

「うむ。明久」

「うん」

美波は立ち止まっていた秀吉と明久に声をかけると2人は3人を追いかける。

第48問

「葵ちゃん、秀吉、また明日ね」

明久と瑞希と別れ、葵と秀吉は2人つきりになると、

「……」

(……まつたぐ、理音が余計な事を言つから何を話たりよこのかわ
からぬのじや)

葵は自分から話すようなタイプではないため、秀吉が葵に話しかけ
よつとはするが、理音の言葉が引っかかり何も言ひ出せず、2人の
間に沈黙が続いている。

「あの、木下くん」

「な、な、なんじやー?」

しばらく歩いてこないと葵が秀吉を呼び、秀吉は驚き顔を裏返す。

「……すいません。私と2人じゃつまらないですね」

「や、そんな事はないのじやー?」

葵は会話がないのは自分が暗いせいだと思つておつ、いつむきながら言つと秀吉は慌てて否定し、

「理音からおかしな事を言われてのう。その事を考えてしまったの

じゃ。それにワシの方こそすまんのじゃ。あまり、女子と2人と言
うのはなかつたのでのう。何を話して良いのかわからぬのじゃ」

秀吉も女子と2人と並ぶのは経験がないと困つたように笑う。

「やうなんですか？　木下くんはきれいだから、女の子から告白と
かされてるんじゃないんですか？」

「……残念ながら、そんな経験はないのじゃ。なぜか、ワシは女
子から異性と意識されないようでのう」

葵は意外だと笑う表情をすると秀吉は自分は女の子から異性扱いさ
れてないと自覚しているようで落ち込んで行き、

「あ、あのー？　！」、「ごめんなさい！？」

「……謝らないで欲しいのじゃ、余計に落ち込むのじゃ」

葵はそんな秀吉を見て頭を深々と下げて謝ると秀吉はため息を吐く。

「で、でも、木下くんはきれいですし、優しいですし、直ぐに彼女
さんができますよ。木下くんだって好きな人が居るんですね？」

「好きな人？　……」

葵は秀吉を励ますと慌てて言つと秀吉は葵の言葉と理音の言葉が
重なり、葵の顔を直視できなくなり、顔を真っ赤にしてうつむく。

「木下くん、私、何か木下くんの気に障る事を言いましたか？」

「う、違つのじやー? い、これなつじやつたので、ワシはもうこりこれとあるのじやー?」

葵が不安げに秀吉の顔を覗き込むと秀吉は顔を真つ赤にして何もないこと叫びと、

「す、すまぬのじやー? ハ、ワシは無用を懇に出したのじやー?」

「は、せー。それじゃあ、明日もよろしくお願こしあず」

「ハ、つむ」

秀吉は葵から逃げ出さよひに駆け出す。

第49問

「それで逃げ出してきたのか？」

「くタレだな」

秀吉は葵から逃げ出すと家に帰らずに理音の家に行へと理音となせか理音の家に居る恭一にくタレ扱いされる。

「う、うねやこのじや！… だいたい、根本、お主がなゼコレおるのじや…」

「俺は前田に勉強を見て貰つてゐんだよ。なんか文句あるか？」

秀吉は恭一に向かい言つと恭一はため息を吐きながら、理音に召喚大会のために勉強を見てもらつてこると言つ。

「まあ、2人とも落ち着け。それで、秀吉、お前は結局はどうしたいんだ？」

「どひしたいとせどひつて事じや？」

理音は表情を変える事なく紅茶を秀吉の前に置くと秀吉に葵の事を聞くが秀吉は未だにどひしたいのかわからないよう肩を落として言つ。

「……前田、ここつは本当に大丈夫なのか？」

「仕方ないだろ。性別が秀吉なんだから」

恭一は煮え切らない秀吉の様子にため息を吐くと理音はため息を吐く、

「秀吉、学校で言つた事をもう一度、言つた。本宮は原石だ。お前がはつきりとしないとあいつは誰かに横からかいつらわれるんだ」

秀吉に向かいに立つ。

「しかし、ワシは……」

「なあ。前田、先にはつきりさせた方が良いんじゃないか？ 今の木下は」の間、俺とお前が屋上であつた時と一緒にじゃないのか？」

恭一は秀吉の様子にまづ秀吉の気持ちをせつせつと語り、

「せうだな。秀吉、お前は本宮とや……」

「…………だから、前田、お前は少し言葉を選べよ。木下、お前はあの地味女の事をどう想つてるんだ？ クラスの姫路と島田と同じように感じてるのか？」

理音はズストレートで秀吉に向かうが恭一が理音の口を塞ぎ、秀吉に聞く。

「…………姫路や島田とは違つ氣がするのじや。本宮の泣きそつな顔を見るとこの辺がチクチクと痛むのじや。本宮には笑つて欲しいのじや」

「……エリス、やつはつかわかるか？」

「……それがなぜかわからんのじゃ」

秀吉は未だに葵が好きな事を自覚していないようで困ったように笑う。

「……なあ、前田、俺は事実を突きつけ良こと思つか？」

「……やうしてやつてくれ」

恭一は秀吉の鈍さにこじめかみを押されると理音はため息を吐きながら頷く。

「木下、お前があの地味女を気にするのはお前があの地味女に惚れてるからだ。それくらいいづけよ。お前と良一、前田と良一何なんだよ」

「根本！？　い、いきなり何を言ひのじや！？　ワ、ワシは本宮の事など……」

「なら、動搖するな」

恭一は疲れたと言いたげに秀吉が葵に惚れてると互いに秀吉は顔を真つ赤にして否定するが理音は秀吉に落ち着けと言へ。

第50問

「ワシは落ち着いておるのじゅや……」

「知ってるか。木下、落ち着いてる人間には落ち着けとは言わないんだ。それと氣にしてないつて言つなら、ここで地味女が嫌いと言え」

秀吉は恭一から聞かされた言葉を動搖しながらも紅燈籠に向かうと恭一はそれなはつきりと否定するように言つた。

「や、それは……」

「できないんだろ? つたぐ、答へなんて出でんじゃねえかよ。なんで認めたくないんだよ」

しかし、秀吉は葵が嫌いだとは言つ事が出来ずに頭を伏せてしまい、恭一はそんな秀吉を見てため息を吐く。

「.....それは、本題には好きな馬がこらのじゅや」

「.....なあ。秀吉、一つ聞くぞ」

「へ、ひむ。なんじゅ?」

秀吉は葵が理音を好きな事を知つてゐたため、ビックリしたら良いかわからぬ部分もあるようで下を向くと理音が秀吉に声をかける。

「お前の初恋はこつだ?」

「い、いきなり、どうしたのじゃ？」

「それらしいのはなかつただろ。優子も知らないと言つてたしな」

「……うむ。言われるとあつたかわからんのじゃ」

理音は先ほど優子に聞いた秀吉の初恋について本人に聞くと秀吉は意味がわからないようで首を傾げると理音は念を押すと秀吉は「気まずやうに頷く。

「……なあ、前田、こいつは大丈夫なのか？」

「俺が言つのもなんだが恋愛なんて、人それぞれだろ」

恭一は何度目になつたかわからないため息を吐き言つと理音は表情を変える事なく言つ、「

「秀吉、本當が俺を好きだと思っているのはあいつの勘違いだ。あいつの俺への想いは恋愛と言つよりは親兄弟相手の情愛に近い」

「……おー。前田、お前はいろいろと考える」

理音は恭一がいる事など気にする事なく、葵が自分の事を好きだと言つと恭一は眉間にシワを寄せると、「

「事実だからな。今は秀吉に説明しないといけないんだから気にするな」

「……気にするなつて言つてもな」

理音の表情は変わる事なく言い切ると恭一はさうして良いかわからぬ表情をして言つた。

「理音、なぜ、根本があるのこそその話を、いやつは」

「秀吉、睨むな。俺も根本が卑怯な手を使うとは聞いた事がある。しかし、今回に關しては問題ない。こいつが眞面目に……」

「前田、余計な事を言つた。まあ、今はそんな気分じゃねえしな。それに俺はお前らFクラスのバカどもと違つて前田を敵に回すような愚策は取らねえよ」

秀吉は葵の弱みを恭一に聞かれたため、恭一を睨みつけるが理音は秀吉が心配してる事にはならないと言つて、恭一は葵を脅すと理音を怒りせると理解してこいつでため息を吐く。

第51問

「しかし……」

「しつけえな。だいたい、あの地味娘は同じクラスなんだ。脅して、使いようがないだろ」

秀吉はまだ納得がいなかいよつで恭一を睨みつけるが恭一はため息を吐く。

「続けるぞ。あいつが俺を好きだと勘違いしている原因はたまたま、俺とアキがいじめられてたあいつを助けたからだ」

「いじめ？ 確かにな。ガキの頃から、あんなうじつけじしてればいじめられても仕方ねえよ」

理音が葵と出会った時の事を思い出して言つと恭一は葵の性格ならいじめられて当然だと言つ。

「まあ、女は知らないが男はガキだから、あいつをいじめてたんだらうづけどな」

「それはどういふ事じゃ？」

理音の言葉に秀吉は首を傾げると、

「察しが悪いな。あいつはガキの頃はそれなりに入気があつたんだよ。大人しくて守つてあげたくなるような女の子」

「あれか？ 好きな娘をいじめたくなるヤツだろ。ガキくせえな」

「仕方ないだろ。当時はガキなんだからな」

理音の言葉に恭一はため息を吐ぐが、

「なぜじゃー！ 好きなら、なぜ、本宮に誰も優しくしないのじゃ」

秀吉は小学生の男の子の考えがわからないよつで声をあげる。

「簡単な事だ。誰も前に出る勇気がないんだよ。身をていしてあいつを守るのが怖かった。友人を裏切れなかつたんだよ。そこに飛び込んだのがアキだ」

「なあ、それなら、地味娘はなんで吉井にいかなかつたんだ？」

理音の言葉を聞いて恭一が首を傾げると、

「後は周りの問題だ。アキは周りに人が集まる。俺にはあの頃はアキ以外は近寄つてこなかつたからな」

「……いじめられて人見知りか。一人でいるお前に親近感を持つたんだろうな」

理音の言葉に恭一は頷く。

「そう言つ事だ。俺の近くにいれば男にはいじめられないからな」

「じゃが……」

「あいつはやの居心地の良さを恋愛とすげ替えただけだ

秀吉は納得いかないようだが、理音は葵の自分への想いは恋愛ではないと言いたる。

「理音、お主はなぜ、そんな事を言へるのじゃ。本宮は本氣でお主の事が好きなのじゃぞ！？」

「……仮にそりだとして、俺ごどりつゝと話つんだ。俺はこの間から、優子と付き合つてゐるんだぞ」

秀吉は葵の気持ちを大切にしろと理音につかみかかるが、理音は秀吉の手を払つとため息を吐きながら優子と付き合い始めたと言つ、

「……いつからじやー！？」

秀吉は理音の言葉に一瞬、呆けた後、驚きの声をあげる。

第51問（後書き）

どうも、作者です。

少しだけ見えた理音の過去。

なぜ、番外編で伏線を張る？（苦笑）

まあ、番外編を見てくれる事で本編を膨らませるのも必要かな？と。

そして、番外編で秀吉にだけ、先に優子と理音が付き合い始めたと報告です。

他のメンバーには清涼祭までバレません。（苦笑）

理音と恭一は友人に見えてるのかな？

恭一は嫌われるキャラクターだから、ちょっと不安です。

第52問

「ん？　お前の「ひび」に泊まつた次の日からだ。気づいてなかつたのか？」

「しかし、あの日はお主はデータ収集じや、なんじやと話しておつたではないか！？」

「良いか。秀吉、それはそれだ」

驚きの声をあげる秀吉とは対称的に理音は冷静に話す。

「だから、本宮がいくら俺を好きだと言つても俺は断るしかできないぞ。それともお前は俺に一股をかけると話つのか？」

「話つわけなこでありますー？」

理音は無表情のまま聞くと秀吉は当然、声をあげる。

「なあ、秀吉、お前はここまであいつのために声をあげていろのこ、まだ自分の気持ちを認めるのが怖いのか？」

「……」

「恋愛はお互いの気持ちがあるから一方的はない。そのまま、自分の想いを認めないでいて、あいつが先を歩き出した時、今のお前があいつにおいて行かれるぞ」

理音はまつすぐに秀吉に向つて秀吉は理音から視線を逸らす。

「なら、ワシはまだすれば良いのじゃ？」

「知らん」

秀吉は理音に聞くが理音は秀吉を突き放し、

「それはワシには……」

「勘違いするな。お前が自分の気持ちを認めようとしないなら、俺はお前に協力はしない。お前があいつと先に進みたいと言つなら協力をしてやるし、認めないなら、今まで通り、本宮の人見知りが治るよう協力するだけだ」

秀吉は理音に見捨てられたと思い、この場から逃げ出そうとするが、理音は秀吉にもう一度、葵との事をどうしたいか秀吉に聞く。

「なあ、木下、ほつきつ言えよ。さつきはあれだけ、地味娘の笑つてのを見たいと言つたのは嘘か？」

「嘘ではない……ワシはもつと本宮の笑つた顔が見たいのじゃ」

恭一が秀吉に白状しようと叫びと秀吉はよつやく自分の気持ちを認めるが、

「違うだろ。自分にだけ笑いかけて欲しいんだひ？」

理音は秀吉をからかいつつに笑つ。

「やうじゅ。ワシがそんな事を言つたら悪いのか！？」

「別に悪くない」

秀吉は顔を真っ赤にして、言いつと理音はくすりと笑い、

「とりあえず、アキ達にバレると暴動になるから、ここで対策でも立てるか？」

「……俺を巻き込むな」

「乗りかかった船だら」

恭一に秀吉と葵をくつつけた『協力しりと』。

「頼むのじゃ。根本は彼女があるのであれば、ワシに協力して欲しいのじゃ」

「……はあ。俺のキャラじゃないんだが、前田には借りがあるしな」

秀吉は自分ではどうしたら良いかわからないため、友香と付き合つている恭一なら何が良いアドバイスをくれると思った頭を下げるが恭一はしぶしぶ頷く。

第53問

「……」

「肩に力が入りすぎだ」

秀吉は今日は一人で葵を迎えてBクラスに行こうとするが、緊張している姿が目に見え、理音に後ろから頭を叩かれる。

「り、理音、何をするのじや！？」

「何をするじゃないだろ。そんなガチガチの状態で迎えに行つたら、本宮に伝染するだ」

秀吉は理音に叩かれたのが痛かったようで涙目で理音の顔を見上げると理音はため息を吐き、

「俺は今日もばあとのところに行かないといけないからな。何もしてやれないからな」

「う、うむ。わかつてあるのじや。それにお主がいると……」

上手くやるようついで秀吉は頷きながらも理音と葵を会わせるのは避けたいようで頷く。

「一人前に独占欲か？」

「う、うむやうむのじや！？ ワシがそんなものを出してはいけないのかー？」

理音は秀吉の様子にイタズラな笑みを浮かべると秀吉は頬を膨らませると、

「怒るな。お前はそれで良いんだよ。お前は優子の影響でどこか前に行くのを抑えるからな。もう少し、強気に出ても良いんだ」

「うむ。気をつかるのじゃ。それでは、時間もあるから、ワシは行くのじゃ」

理音は理音なりの言葉で秀吉の緊張をほぐすと秀吉は大きく深呼吸をした後、教室を出て行く。

「さてと、俺も行くか?」

「理音、秀吉はどうかしたのか?」

秀吉の背中を見送った後、理音は学園長室に行こうとする雄一が理音に声をかける。

「ん? 少し、あいつに本宮の事を頼んでいたな。その話をしていたんだ」

「そうなのか?」

「ああ。本宮に自信を持たせるためにな。演劇部から協力要請と言う形にして自信を持たせようとな

理音は雄一に秀吉の葵への想いを伝えずに葵に自信を持たせるために演劇部に協力して貰っていると言つ。

「なるほどな。確かにあそこまでの話をかけるなら、演劇部でも重宝しきだらうしな。上手く行けば良いな……秀吉と」

「……気がついていたか」

雄一は納得してくる様子で頷くが、秀吉の葵への想いに気がついていたようだ。やっと笑い、理音は雄一の反応にため息を吐くと、

「アキや他のヤツに話すなよ。暴動になるから」

「確かにな」

雄一に口止めをすると雄一は苦笑いを浮かべながら頷く。

第54問

「……本宮はおるかのう？」

秀吉が葵を迎えてBクラスの教室を覗くと葵の姿はない。

「……根本、本宮はまだじかの掃除に？」

「いや、今日は違う。それとも、他の演劇部のヤツが迎えていたと云つて、いだぞ！」

秀吉が恭一に葵の居場所を聞くと他の演劇部員がきていたと云つて、

「へ、うむ。それではワシも部室に行つてみるのぢや」

秀吉は慌てて演劇部に向かおうとする。

「木下、慌てなくとも本宮を連れて行つたのは女だぞ」

「な、何を云つておるのぢやーー？」

恭一は秀吉の様子にため息を吐き、秀吉は声をあげると、

「……良いから行け」

恭一はため息を吐く。

「つむ。されど根本、世話をなつたのぢや」

「ああ、あまり、慌てるなよ」

「いむ。『氣をつたるのじゅ』」

秀吉は恭一のやる氣のなさそつた応援に返事をして演劇部に向かつ。

「えーと、失礼します」

『本宮さん、そんなに緊張しないでも良いこと』

葵はあまり話した事のない演劇部員が迎えにきたため、緊張した様子で部室に入ると部員は葵の様子に苦笑いを浮かべると、

『ねえねえ。本宮さん、木下くんとせざりじやつて知り合ったの?』

「えーと、共通の友達が居まして……」

『ほほう。友人からの紹介か』

女子部員達の興味は葵と秀吉の関係を聞きたいよつである。

『で、昨日、木下くんが送つてくれたんでしょう……何か進展があつた?』

「進展ですか?……な、な、何を言つてゐんですか!? 私と木下くんとはそんな関係じやないです!?」

葵は演劇部員が自分と秀吉の関係を勘違いしている事に気づき声をあげると、

『本宮さん、かわいい』

「ふえつー?」

2名の女子部員は慌てる葵がツボだつたようだ葵に抱きつき、葵は驚きの声をあげるなか、

『……木下くん、もつと頑張らないといけないね』

『性別秀吉だから、男に見られてなかつたんだ』

他の演劇部員はため息を吐く。

第55問

『……お井りは向をやつておるのじゅへ。』

秀吉は平静を装いながらも演劇部の部室に入ると、

『『『ヘタレ』』』

演劇部員のほとんどは秀吉が葵に惚れっこりた時に気がついていたため、秀吉を見てため息を吐く。

「あ、お井りはこななり向をまつひのじゅへ。」

『いの間から見てればだいたいの人間は氣づくべ

『木下、時間がないんだ。わざと用意しきよ』

秀吉は部員達の言葉に顔を真っ赤にして声をあげるが、部員達は練習を始めるから早くしろと言つて、

『へ、つむ』

顔を赤くしたまま頷く。

『あなた達も本宮さんを解放しない。始めるわよ』

『ええ！？ もつと、本宮さんで遊びたい』

『やめううー？』

『……皿を回してみるか』

葵で遊んでいる部員達にも声をかけると抱きつかれてもみくちゅんされた葵は皿を回しておつ、

「本富、大丈夫かー?」

秀吉は慌てて葵に駆け寄ると、

『どうあえず、休ませて置きましょ。あんた達、反省しなやこよ。木下くんも自分のやるべき事をやる事』

『はーい』

『反省してみながら、きちんと返事』

『はーい』

先輩部員はため息を吐きながら指示を出して行き、

『木下くんも』

『し、しかし』

『あなたがついててもどうにもならぬでしょ。それに本富さんを彼女にできれば清涼祭や本富さんも自信はひとつでも良このへん』

「良くないのじゅ」

『わかつたなら、やるわよ』

先輩部員は秀吉の返事を聞いて満足そうに笑うと、

『木下くんの恋愛は一度置いといて本宮さんみたいに脚本をかける人間は貴重な^{ほん}の。清涼祭を成功させて本宮さんを演劇部に引き入れるよ。気合を入れて』

葵の事を演劇部員達は評価しているよう^ひで、秀吉や理音の考えていた速やより速いスピードで葵を演劇部に引き入れる計画が動き始める。

第56問

「……うーん？ あれ、私……」

葵が田を覚ますとすでに演劇部の練習が始まり、部員達の妥協のない意見がぶつかり合っている。

(……私がいる必要つてあるのかな?)

葵は自分が氣を失つている間に始まつた練習には自分が入る余地などないと思つたようで田を伏せてしまつと、

『本宮、田を覚ましたなら』ひりひりで感想聞かせて』

「えつーー？」

先輩部員が葵に氣づいて手招きをするが葵は一步を踏み出せずにいる。

『本宮、清涼祭での演技は私達だけじゃない。あなたの作品でもあるんだ。本を書いたあんたが思つ事を言つてくれなきや、あたし達は困るよ』

「は、はーー？」

先輩部員が葵の反応にため息を吐くと葵は慌てて先輩部員の元に駆け寄り、

『最初から、通すよ。本宮、しつかりと頼むよ。木下、さつきみた

いに気の抜けた演技したら、前田から怪しい薬を貰つてきて飲ませるよ』

「う、うむ。わかったのじゃが……先輩、なぜ、理音が出てくるのじや?」

先輩部員は葵の事が気になり集中していなかつた秀吉に理音の薬をちらつかせて発破をかけると秀吉は理音と先輩部員の繫がりに首を傾げる。

『決まつてゐでしょ。使えるからよ。まつたく、なんで2年には木下とか本宮とか前田とか才能の塊がゴロゴロと転がつてゐるよ』

「……あやつの交友関係がまつたくわからんのじや

理音は先輩部員とじこかでつながつてこるので秀吉は理音の交友関係にため息を吐くと、

『木下、始めるよ。本宮、あんたは話すの苦手なんだから、思った事を全部書き出しね』

「は、はーー?」

「うむ

先輩は葵がネガティブになる前に指示をだし、練習を再開せざる。

第57問

(……………！）いつ直した方が、でも、それだと！さあを……）

葵は先輩部員の言ひ通り、気づいた点をノートに書き出し始めると集中し始めたよつで黙々と気づいた点をノートに書きだめて行く。

『よし。本題……くえ』

流しでやつた演技も終了し、先輩部員は葵の様子に感心したよつて頷くとい、

『10分、休憩。本宮の話を聞いたら、もう一度、最初からね』

休憩の指示を出す。

（……木下くんの声は良く通るから、それなら、いつして印象づけた方が良いかな？ でも、それなら……）

『木下、今、声をかけるんじゃなによ』

「う、むいり」

秀吉は葵に話しかけよつとして先輩部員に止められて少しバツが悪そうな表情をすると、

『今あの娘は必死に考えているんだ。あなたの性格上、本題を諦める事しかしないでしょ。あんたと前田くんが考えたのは荒療治なんでしょう？ 今はあの娘から言いたい事を聞き出して、あたし達と

意見をぶつけ合つ事が重要な。その後のフォローがあんたの役目。わかる。』

「う、うむ」

『しかし、木下も本宮も良い友達を持ったわね。ここまでしてくれるのでないわよ』

先輩部員は秀吉に言ひ聞かせて、秀吉と葵の交友関係を讃める。

「ワシもねう思つのじや。理音も明久も姫路や島田も本宮を心配してゐるし、何より、本宮の才能を信じてゐる……」

『木下もでしょ。あたし達だって、あの娘の才能が非凡だつて事はわかる。だけどね。ずっと演じてきた意地つてのもあるのよ。だから、あたし達にも意地での娘が潰されようが知らないわ。そういうふうにあんたがちゃんと呉えなさい。ワシは男じやつて言う言葉が口先だけじゃないとこをけやんと見せるのよ』

「う、うむ」

先輩部員は秀吉に気合いを入れるために彼の背中を思つつきり叩くと秀吉は返事をするが、背中が少し痛かったようで皿には少し涙がにじむ。

第58問

『それじゃあ、本宮』

「は、はいー? ……」

先輩部員は葵に練習を見て気づいた点を話せと言つと葵は返事をした後、何も言わずに黙り込んでしまった。

『……仕方ないね』

「あつー?」

『時間がないんだから、あたしから話つよ。まずは……』

先輩部員は葵の考えを書き留めたノートを取り上げると葵が感じた事やセリフの変更などが次々と発表される度に、演劇部員の顔は陥しくなつて行き、

(……あつ)

葵は部員達の様子に自分が余計な事をしたと思い顔を伏せる。

『……まあ、一通り、発表させて貰つたんだけど、これはあくまでも本宮の意見だよ。他に意見がある人間は?』

『それじゃあ……』

先輩部員は他の部員にも意見を聞くと部員達は葵の意見への反対意

見、賛成意見を討論し始めるが誰も葵を責めるような事は言わずに、

(あれ?)

葵は責められと思つていたため、何があつたかわからない様子である。

「本宮、呆けてないで聞くのじや。お主の意見へのそれぞれの意見を論じているのじや。人の意見が聞ける貴重な機会じや。皆の意見が出るのじや。ちゃんと聞いておかぬと損をするのじや」

「はい!?

秀吉は呆けている葵に声をかけると葵は慌てて返事をする。

『本宮、木下、聞いてるのかい!! 本宮、あんたはまともに意見を言えないんだ。ちゃんと考え方をまとめておきな。木下、あなたの意見をわかつたとだす』

「「は、はい!?」」

集中していない2人へ、先輩部員が声をあげると2人は慌てて返事をし、葵は先輩部員の言葉に慌ててノートに向かい、秀吉は自分の意見をあげる。

第59問

(……凄い。やつや、話したばかりの事を実行しようとしてる)

葵は先ほどの討論の後に部員達の演技が変化している事に感動していられるのである。

(……びっくり、すぐにあんな風にできるんだひつへ…)

しかし、自分は討論の時に何も言えなかつたためか落ち込み始め背後には重苦しい空気が漂いだす。

『……木下、本宮つて割とわかりやすいよな?』

「つむ。感情がすぐこでるのは悪い事ではないのじやが、あれは周りに影響がでそうじやの」

葵が落ち込んでいる間に演技は終わり、秀吉と男子部員達が葵の様子に苦笑いを浮かべた時、

『それじゃあ、時間も時間だから、今日は終わり、片付けるよ。本当に、落ち込んでいるヒマがあつたら動きな。ついでにしているとマイナスイメージしかわかないよ』

「は、はいー?」

先輩部員から葵へ指示が飛び、葵は声を裏返して返事をするが、

『木下、本宮と一緒にいてやれ』

「へ、ひむ」

葵はビルに行つたら良いのかわからずおたおたしており、男子部員の一人が秀吉の肩を叩くと秀吉は葵の元に歩き出る。

「本宮、いっちを手伝つて欲しいのじや。ビルに何があるかも一緒に教えるので覚えて欲しいのじや」

「は、はいー?」

葵に自分と回じといふを片付けようと葵の手を引いて行く。

『まつ。わづくるか?』

『いま、本宮が声を裏返したのは木下に手を引かれたからか?』

『……いや、まずは木下が男扱いられてるか判断しないといけないから保留だ』

『やつぱつ、ネックは性別秀吉か?』

男子部員は葵と秀吉の様子を見て口をつぶし出した時、

『あんた達、遊んでない』

先輩部員から怒鳴られ男子部員は四散して行く。

第60問

「それで、一緒に帰つただけか?」

「へタレだな」

「うるさいのじやー? と書つか、なぜ、今日は雄一なのじやー!?」

秀吉は葵を家まで送り届け、理音の家に顔を出すと今日は雄一一ではなく、雄二が居間に座っている。

「なぜ? お前も知つてゐるだろ。俺も明久も理音に勉強を見て貰つてるんだ」

「パソコンまで借りたんじや。家でやつておれば良いじやろ」

雄一は理音から借りたパソコンに入力をしながらいつと秀吉は不満そうな表情で言ひ。

「家でやると邪魔が入るそうだ」

「翔子が『勉強なら私が教える。私に勉強を聞かないのは理音が浮気相手?』とかわけのわからない事を言い出してな。こいつを壊されそうになつてな。壊されたら弁償できる気はしないからなし、最高得点じゃないか?」

「やはり、お前は覚えが良いな」

雄一は家で一人で勉強をすると翔子からの襲撃があると言つながら

も確実に理音が用意した問題を終わらせてくる。

「それで、本題は上手く溶け込めそうなのか？」

「うむ……」

「雄一なら、知つてこるから、気にするな」

秀吉は雄一がこことひで話して良いものか考えるが理音は雄一もすでに秀吉が葵の事を好きだと知つてこると言つと、

「なぜなのじやー…。」、理音、お主、雄一に話したのかー…。」

秀吉は理音が雄一に話したと想つたよつて理音につつかみかかる。

「俺は話していない」

「それくらこは気つくだら。姫路や島田と一緒に前もわかりやすいんだよ」

理音は表情を変える事なく、秀吉の手を払うと雄一はため息を吐く。
秀吉は雄一の言葉に驚きの声をあげると理音はため息を吐く。

「……良いから、早く本題に入れ。俺も毎日、進展のないお前らの話を聞くほどじやないんだ」

「な、なぜなのじやー…。」

第61問

「……なるほど？」

「どうかのう？」

秀吉は理音に今田の事を報じると理音は喜んで込み、秀吉は心配そうな表情で理音に聞く。

「……いや、あの先輩なら、確かに言いつつだが」

「どうかしたのか？」

「秀吉から話を聞く限り、秀吉いらなくなつか？」

理音はあまり、葵のために何もできていない秀吉を見て、隠す事なく直球を投げると、

「……何となくじやが、ワシもわづかっておったのじや」

「うつと待て、秀吉、落ち込むな！？ 理音、お前もわづかし言葉を選べーー！」

秀吉は自分の不甲斐なさを感じてるのでため息を吐き、雄一は理音に言葉を選べと言ひ。

「ん。 そうだな。 言ひ過ぎたか。 一先ずは本来、お前にわづかして貰おうとした事を自分からやつてくれている先輩がいるんだ。 そつちは任せたければ良い」

「それでは、ワシは何をするべきかのじや？」

「今まで通りの本富のフォローと自分の演技に集中する事」

「確かにな。秀吉は演技に集中しきれてないんじゃないじゃないか？ 演劇部の公演を成功させる事で本富にやればできると言つ事を教えたいたいのに秀吉が腑抜けた事をやつて、役をおされる。最悪、公演が失敗つてなると終わりだしな」

理音と雄一は秀吉に葵だけに気を取られるなど言つて、

「う、うむ。それはわかつておぬのじや」

秀吉は頷くがどうか心に残すと書いた印象が見える。

「おこ。俺の話を聞いてるか？」

「やじのむ。うちやんと聞いてるのじや」

「なら、お前のやる事はヒロインへの愛の告白シーンも相手が本富だと思って練習しや。迫真的演技じゃなくて良こ。田の前に本富がいるとしてお前の心をぶつけっこ」

「や、それは少し恥ずかしくはないかのう？」

理音が秀吉にやるべき事を云ふと秀吉は顔を赤らめるが、

「理性で動こうとするな。お前のなかにある感情をぶつけなことあり」

「理性で動かすこと思つね」

「本當はぶつけられると吹っ飛んで行きそつた氣もあるやじな」

理音は秀吉から視線を逸らす事なく、くすりと笑い言つと雄一はため息を吐く。

「でも、まあ、お前はどーとか引いてる部分もあるからな。それも良いんじゃないか?」

「わづかのう。うむ。頑張つて見るのじや」

雄一は秀吉に向かい頑張れと言つと秀吉は大きく頷き、

「秀吉、そんなお前にプレゼントをやつしや」

「映画のペアチケットじやな」

「週末、演技の参考にしたいからとでも言つて誘え」

理音は邪悪な笑みを浮かべて秀吉に薬をテートに誘えと言つ。

「貰つても良いのか? 理音が姉上を誘えば良いではないのか?」

「俺と優子の場合はどうしても玲生がセシトになるからな。映画は向かない」

「なるほどのう。それなら、遠慮なくいただぐのじや」

秀吉は理音が何かを企んでいる事など気づかず、笑顔を見せた。

「……なあ、理音。お前、何を企んでいる?」

「別に何も企んではいない。ただ、もう一枚、あつたペアチケットは霧島にやつたがな」

「お前!? なんて事をしてくれるんだ!?」

雄一は理音の様子に何を企んでいると聞くと理音からは雄一にじまつちりが行くようになつていて、

第6-1問（後書き）

どうも、作者です。

お膳立てができた葵と秀吉のデート。秀吉は上手く葵を誘えるんで
しょうか？

そして、雄一が翔子に捕まつた映画は『恋と理性と幼なじみ』の映
画の日と重なっています。
だから、本編で翔子は雄一の腕にしきりと抱きついています。

第62問

(……理音から、映画のチケットを貰つたのは良いのじゃが、……渡せぬのじゃ)

秀吉は理音から映画のペアチケットを貰つた翌日、葵を「テーートに誘おうとするが、邪魔が入つたりとタイミングが悪く渡せない」ようで教室でため息を吐いていると、

「秀吉、どうかしたの？」

「あ、明久！？ な、何もないのじゃーー？」

ため息を吐いている秀吉を見て明久が声をかけると秀吉は声を裏返して慌て、

「……あいつは演劇部のくせにどうしてああ言つ時の対処はできないんだ？」

「さあな」

事情を知っている理音と雄一はため息を吐いてくる。

「それで、秀吉、ため息なんて吐いてどうかしたの？」

「な、何もないのじゃーー！」

明久は改めて秀吉に聞くと秀吉は慌てて何もないと言つが、

「秀吉、何か落ちたよ……映画のペアチケット?」

慌てたせいか、映画のチケットを落とし明久がチケットを拾つと、秀吉が『ペアチケット』を持つて居ると言う事に教室がざわめきだす。

「……まさか、自分達が誘つて貰えると思つてたりはしないよな?」

「……確実に思つてゐるだろ?」

理音と雄一は教室の空氣にため息を吐くと、

「ひ、秀吉、このチケットはどうしたの?」

「つむ。理音から貰つたのじゃ」

明久は『美少女秀吉』がペアチケットをどうのよつて使つたか気になり、まずははどうしたかと聞くと秀吉は理音から貰つたと言つて、

『総員、狙え!』

「リオ、まさか、リオがボク達を裏切るなんてね」

『前田を生きて帰すな!!』

理音が秀吉を『テート』に誘つたと勘違いしたよつてクラスメート達は理音に向けて殺意を向け、

「……死にたいヤツからかかって!」

理音に撃退されて行く。

「……秀吉、ちやんと答へる。お前のせいで誰かが死ぬぞ」

「ひ、ひむ。理音は玲生へんとでは長時間の映画は見れないと言つてのう。演技の勉強に使つてくれと言つてくれたのじや」

雄一は教室で理音の手で起こなわれている虐殺風景にため息を吐き言つと秀吉は理音から貰つた経緯を話すと、

「……それで、木下。誰を誘つもりなのかしら?」

「……詳しい話を聞かせて貰えますか?」

瑞希と美波は秀吉が明久を誘つと勝手に勘違いして秀吉の肩をつかむ。

第62問（後書き）

いつも、作者です。

秀吉がペアチケットを持っている事で教室大騒ぎ。（爆笑）

秀吉『は』無事に葵を『デートに誘えるんでしょうか？（悪笑）

第63問

「姫路、島田、い、こきなり、どうしたのじゃ？」

「ねえ。木下、そのチケットでまさかアキを誘う『気じゃないわよね？』

「木下くん、抜け駆けはズルいですよ」

秀吉は瑞希と美波の様子に顔をひきつらせると瑞希と美波は何を勘違いしているのか、無駄な殺意を垂れ流している。

「ま、待つのじゃー？なぜ、ワシが明久を誘わないといけないのじゃー？」

「えつー？」

「……なぜ、驚くのじゃ？」

秀吉が明久を誘うつもりはないこと言つと瑞希と美波は驚きの声を上げると秀吉はため息を吐く。

「2人とも勘違いするな。秀吉は本宮を誘うんだ」

「ゆ、雄ーー？」

「理音が本宮に演技を見せてやれって言つてな」

雄一はため息を吐きながら、理音が秀吉にチケットを渡した理由を

話すと、

「本来なら、舞台とかの方が良いんだろうがな。清涼祭前ではチケットも取れなくてな。映画のチケットにしたわけだ」

理音は積み上げた屍を見上げながら言い、その屍のなかには明久も混じっている。

「葵を？……それならそいつと最初から言いなすことよ」

「……お前らは少し人の話を聞く事を覚えろ。秀吉が話す前に詰め寄つたのは誰だ？」

「「あはは」」

美波は理音と雄一から秀吉が誰を映画に誘うか聞いてため息を吐くと理音は呆れたように言い、瑞希と美波は理音から目を逸らして笑うと、

「そ、それで葵ちゃんは誘えたんですか？」

「……まだなのじゃ」

瑞希は自分が不利な状況を変えるために、秀吉に葵を誘えたかを聞くと秀吉は気まずそうに首を振る。

「何やつてるのよ。映画に誘つだけでしょ。同性なんだから気軽に誘えば良いじゃない」

「ワシは男じや…？」

美波は相変わらず、秀吉を女の子扱いしており、ため息を吐くと秀吉は声を上げ、

「まあ、秀吉はどちらかと言えば誰かに誘われて動くタイプだからな」

「雄一は秀吉は異性を誘うのになれていないと嘆く。

「う、うむ。恥ずかしながら、やうなのじや。何度か誘いに行つたのじやが、顔を見ると緊張してしまつてのう」

「それなら、メールで誘えば良いんじやないの?」

「しかし、ワシは携帯電話を持つておらぬのじや」

美波は秀吉にメールで葵を誘つよつていつて秀吉は苦笑いを浮かべると、

「 もう。……えーと、葵のアドレスは……」

美波は秀吉ではうちがあかなこと思つたよつて秀吉が葵を映画に誘いたいと書いた内容でメールを出す。

「島田、何をするのじやー?」

「あんたがさうせとしないからでしょ」

秀吉は美波の行動に驚きの声をあげるが美波は秀吉が悪いと言つ切り、

「……男らしいな」

「そうだな」

理音と雄一は美波の行動を見て苦笑いを浮かべると、

「前田、坂本、何か言つた？」

美波は2人を睨みつける。

第63問（後書き）

どうも、作者です。

美波が葵を誘いました。（苦笑）

恋に奥手な秀吉は葵からの返事を聞き、上手く彼女をエスコートできるのでしょうか？（悪笑）

第64問

『……それで、木下くんからデートに誘われたわけね?』

「えーと、前田くんが私が演劇部の手伝いをしてる事を知つて木下くんに預けてくれたみたいですね」

葵はお昼休みになり、いつものように一人でお弁当を食べようとしていたのだが、演劇部の女子部員に捕まり、一緒に弁当を広げると、どこから広がったかわからないが秀吉が葵を映画に誘つた話は演劇部全員には広がっているようであるが、葵は秀吉に他意があるとは思つてゐるせいか苦笑いを浮かべると、

『……本宮さんのこの反応を見るにやっぱり、木下くんは異性に見られてないわよ』

『第3の性別のハンデは大きいわね』

部員達は葵に聞こえないように秀吉との仲を心配する(たのしんでいふ)。

『でもや。木下くんと葵は2人で映画を観に行くのよね? それって、完全にデートでしょ?』

「違いますよ。木下くんは優しいから、私を気づかってくれてるだけで、それにもう1度をくれたのは島田さんですしそれ」

演劇部員は葵にデートだと思わせたいよつて秀吉からのデートだと言つてゐるが誘つたのは美波のため、葵はそんな事なこと困つたよ

うに笑うと演劇部員達は理音達 F クラスの面々が舞台を整えているのに自分から動かない秀吉^{（ホタケ）}の事を考えて舌打ちをするが、

『えーと、それで、何を観るつもり？ 今なら……恋愛物で評判が良いのがあつたはずよ』

『わづね。恋愛物なり話の流れで舌田の一つへりこ』

不自然なくらいに『恋愛物』を薦めると、

「えーと、私、あまり、人混みが得意ではないので映画館みたいな……」

葵は人混みが苦手だからと言つ理由で秀吉からの誘いを断ろつと思つていいようであり、

『…………』

葵の様子に演劇部員達は一度、固まる。

「えーと、どうかしましたか？」

『…………本富さん、断つたらダメよ。木下くんも前田くんも本富さんのために映画のチケットまで用意してくれてるんだからね』

葵は演劇部員達が固まつた意味がわからず首を傾げると部員の1人が断つてはいけないと直つが、

「で、でも、私、演技の事はわかりませんし。観ても、木下くんと演技の話もできませんし、私なんかと行つても木下くんはつまらな

「でしょ、うし……」

『だから、木下くんが一緒にくるんですよ。本宮さん、一人なら、今みたいに行かない。って言つたりするでしょ。演劇部を手伝つて貰つて、本宮さんは自分の意見を言つのが苦手なんだから誰かと少しでも、話をするようにしないとダメだよ』

葵は自分と行つても秀吉が楽しめなこと言つが、演劇部員達は頭のために行くんだから、秀吉は気にするなと言つ、

「で、ですか？」

『『『良いから行きなさい』』』

「は、はい！？」

葵は演劇部員達の勢いに慌てて頷く。

第65問

『木下、集中しな……身が入らないなら追に出すよ……』

「つむ。わかつておるのじや」

演劇部の練習が始まるとき秀吉は葵に「トークが断られないか心配なようで練習に集中していよいよ見えて、先輩部員から叱咤を受けていれる。

(木下くん、調子悪い)

葵は秀吉の様子が今まで見た事がないくらい調子が悪いのは自分のせいだとは思っていないようで不安そうな表情をすると、

「……つむ」

秀吉は葵の不安そうな顔を見て『合意を入れるために自分の両頬を叩き、

「すまぬのじや。もう一度、頼むのじや」

真剣な表情をして練習に戻る。

「……秀吉、本当にあの娘の事、好きみたいね」

「なんだ？信じてなかつたのか？」

「仕方ないでしょ。あたし、あいつと恋愛話なんてした事なかつた

し

演劇部の練習を外から理音と優子が眺めていると、
『前田にえーと、木下の姉の方ね。そんなところに立つてないで入
つてきなよ』

理音達に気づいた先輩部員が2人を呼ぶ。

「えーと」

「いや、今日はこれを渡しにきただけだ」

『ん。もうできたの。あつがとう。助かるわ

優子はいきなり呼ばれた事に少し気まずそうに笑うが理音は表情を
変える事なく懐から何か取り出すと先輩部員は受け取り、理音に礼
を言つ。

「……ねえ。理音、それは何？」

「ん？　この間、演劇に使う小道具を作つてくれと言われてな

「おかしなものじゃないでしょ？　う？」

優子はまた、理音がおかしなものを作つたのではないかと疑つてい
るよつてジト目で見るが、

『心配しないで良いわよ。火薬とかおかしいものを頼んだわけじゃ
ないから』

先輩部員は苦笑いを浮かべる。

「それで先輩から見て、本宮は溶け込めそうですか?」

『あれ? 前田が心配するんだ。意外ね』

理音は先輩部員に葵の事を聞くと先輩部員はくすりと笑った後、
『私にどれだけ人を見る目があるかはわからないけど、あの娘には
才能はあると思うわ。だけど、前田や木下が心配してるように入付
き合いがね。最近はうちの2年の娘達が気にかけてるけど馴染めて
いるかは微妙なところね』

葵はまだ馴染めていないと言つ。

「そつか……」

『後は木下の頑張りしだいね。1番、夢に近いあいつがどれだけ真
剣に夢に向き合っているか、身を持つて示さないとね』

先輩部員はニヤリと笑うと、秀吉と葵の事を楽しんでいるように見
える。

『……理音、この人に任せて大丈夫?』

「ああ。少なくとも秀吉に発破をかけるのは演劇の事がわからない
俺達にはできない事だからな」

優子は先輩部員の表情に理音の耳元で大丈夫かと聞くと理音はくす

りと笑い問題ないと言い切る。

第66問

『今日はここまで、お疲れさまでした』

先輩部員の言葉で本日の練習が終了すると、

「本領」

「は、はいー?」

秀吉が葵を呼ぶ。

『隊長、あれは本富さんではなく木下くんを意識しているよつて見えますか?』

『……いや、木下は意識しているが、本富は声をかけられた事に驚いているようにしか見えません』

そんな2人の様子を温かく見ていく部員達は、少しお話を始め出すと、

『あんた達も遊んでないで帰る。鍵が閉めらんないでしょ』

先輩部員はため息を吐きながら噂話をしている部員を部室から追い出す。

『でも、先輩だって気になりますよね』

『そうね。だけど、あの2人は周りが騒ぎ出すと上手くこかない

『気がするわ。だいたい、あんた達も他人の事を心配するよつ、じぶの事を心配しなさい』

先輩部員は部員達の言葉を切り捨てるし、

『木下、本宮、そろそろ、鍵を閉めるよ。早く部室から出で

「うむ」

「は、はい」

先輩部員の呼びかけに秀吉と葵は顔を赤くして部室から出る。

『忘れ物はないね。それじゃあ、2人とも気を付けて帰るんだよ』

「は、はい。お疲れさまでした」

「うむ」

先輩部員は鍵を返すために職員室に向かい、

「本宮、葵まで送るのじや」

「い、いえ、そんな毎日、送って貰うわけにはーー?」

秀吉はいつものように葵に送つて「行く」と言つて葵はいつものように慌てて断るが、

「行くのじや」

「は、はいー?」

秀吉は葵の手をつかみ歩き出し、葵は秀吉の行動に声を裏返して返事をすると、

『おひ、木下、手を握りに行つたが。へタレ、返上か?』

『2人とも真つ赤ね。あれで本當をさも氣づけば……ないね』

『ああ。ないな』

演劇部員達はしつかりと物陰から2人の様子を覗いており、

『しぐ、静かにして。行くわよ』

『『『おおーー.』』』

先輩部員の注意を聞く気すらなかつたようすで2人の後を追いかけて行ひりとするが、

『……あんた達は何をやつてるのよ』

先輩部員に見つかり、追跡を諦める。

第67問

「……」

「……」

葵は秀吉に玄関まで手を引かれてきたのだが、上履きを履き替えた後、2人とも妙に恥ずかしくなったようで、2人の間には沈黙が続いているなか、

(……ワシは何をしてしまったのじゃ。本富に了承も得ずに手、手を繋いでしまうとは……しかし、本富の手は小さくて)

秀吉は葵の手を握った事にいろいろな考えが頭をよぎりでは聞いて行くが、

(ち、違ひのじやー？ 先に本富に確認せねばいかんのじゃ)

葵に映画の事を確認する事を思いで、邪念を振り払つよつて頭を振る。

「さ、木下くん、どうかしましたか？」

「な、何でもないのじや……」

葵は秀吉の様子に何かあったかと聞くと秀吉は何もないと言つた後、大きく息を吸い深呼吸をして、

「も、本富、島田から、メールが行つたとは思ひのじやが……映画

はこつが都合が良いかの、」

「は、はい。えーとですね……」

葵に映画トークの事を聞くと、葵はざらに答えて良いかもとまつていよいようで沈黙してしまつ。

(…………ダメなのかの、。しかし、理音の言つ通りに行く事が前提で話をしたのじや。本宮の性格上、ここから、断られはしないはずじゃ)

黙ってしまう葵を見て、秀吉は事前に理音と打ち合わせをしたようで大丈夫だと言い聞かせるようにしていると、

「あ、あの。本当に私を誘ってくれるんですか？ 私、映画を観ても木下くんの演技の参考になるような事は何も言えませんよ」

「な、何を言つておるのじや、ワシは本宮と映画に行きたいのじや！…………あつー？」

葵が遠慮がちに暫つと秀吉は口を濁らせて葵と映画に行きたいと言った本音を葵に伝えた後、自分の言葉に気づき、秀吉の顔は真っ赤に染まって行く。

「あ、木下くん？ も、それって？ あ、あの……」

「！」これはその……あの、なんて言つたら……」

葵は秀吉の言葉に恥ずかしくなつたようで顔を伏せると秀吉は慌て何かを言おうとするが、言葉は上手く出てこないため、2人の間

「はしづし、沈黙が続くと、

「も、本當、いきなり、すまんのじや。お、お主が理音の事を好いておるのはワシだつて知つておるのじや。そ、それでも、ワシはお主が好きなのじや。だから、今度の休みにい、一緒に映画に行って欲しいのじや」

秀吉は沈黙に耐えきれなくなつたようだ、慌てて口を塞ぐ。「ななな元気ひさいわせりなながらも、今度は葵を自分の言葉でトートトト誘う。

「あ、木下くん！？」

「へ、うむ。答へは直ぐじやなくとも良このじや……。」

葵は秀吉の叫びに顔を真つ赤になると秀吉は血分でもどりつたら死いのかわからぬといつて葵を置いて駆け出す。

第6・7問（後書き）

いつも、作者です。

映画を前に秀吉の「グダグダな告白はみなさん」「どう映つたでしょうか？」

秀吉は事故っぽいですが葵に自らの想いを打ち明けました。

秀吉の想いに葵は何か感じたのでしょうか？（悪笑）

第68問

(……あれ？ 今、何があつたのかな？)

葵は秀吉の顔中を見送りながらも、彼女の頭は秀吉の告白を処理仕切れないよつで顔を真つ赤にしたまま呆然としていると、

「やつぱー、葵ちゃん、こんなとこで何をしてるの？」

葵を見かけた愛子が駆け寄つてくる。

「く、工藤さん！？」

「あれ？ そんなに慌ててどうかした…………優子の弟くんに告白でもされた？」

「そ、そ、そ、そんな事はない……」

葵は愛子の姫場に驚きの声をあげると愛子は葵の様子に彼女をからかうように冗談を言つとその冗談は事実であり、葵は慌てて手を噛み涙目になる。

「あひやー、冗談で言つたの。まさか、本当に告白したんだ」

「……」

愛子は葵の様子に苦笑いを浮かべると葵は改めて、秀吉に告白された事を思い出したよつで彼女の顔はゆでだこのよつて真つ赤になり、煙を上げだし、

「ううと、葵ちゃん！？」」「それじゃあれば此このよーへ。」

愛子は葵の様子に心配したが、かわからず口走る。

「……すこません。」迷惑をおかけしました

「うふ。まあ、気にしないでよ。友達なんだしや」

「……」

愛子は近くの喫茶店に葵を引きずり込むと葵は落ち着いたようでは愛子に謝ると愛子は気にしないで良いと言つたが、葵は愛子の言葉に心惑つたような表情をくる。

「どうかした？」

「あ、あの。今、なんて？」

「うーん。そう言つ事か。ボクは葵ちゃんを友達だと思つてたよ。それとも、ボクが友達なんて不満？」

愛子は理音達から葵のコンプレックスを聞いていたようで笑顔を見せて自分は葵の友達だと言つた、

「や、そんな事はないです！？」工藤さんは私と違つて明るくて可愛くてそれに、それに

「あはは。慌てないでよ」

葵は自分が愛子の友達だと話しても、良いかわからなことばかりで慌てていると、愛子は苦笑いを浮かべる。

「それで、葵ちゃんは優子の弟くんの告白はどうやったもん?」

恋愛話に興味があるよつて田を輝かせて葵に聞く。

「そ、それは……私

「葵ちゃんって、告白された時つて嬉しかった?」

葵は秀吉からの告白にどうして良いかわからなによつて顔を伏せる
と、愛子は素直に嬉しかったかどうかを聞く。

「それは、嬉しかったんだと思います。私、暗いし、取り柄なんか
何もないし、それなのに、私の事を好きだって言つて貰えましたし」

「じゃあ、好きなんじょ。難しく考えなくても良いんじゃないかな?」

「でも、私みたいなのがそばに居たら木下くんに迷惑がかかります」

葵は自分のような人間が居たら秀吉の迷惑になると言つと、

「ねえ。葵ちゃん、ボクもね。葵ちゃんの書いたお話、何冊か読ませて貰つたんだけどね。葵ちゃんの書く女の子って、誰かを好きになつて変わつて行く女の子が多いって思つたんだ。これつて、葵ちゃんの『望み』なんじゃないの? 自分も変わりたいって想いが葵ちゃんの書いた作品には溢れてるつてボクは思つんだよね」

「それせ……」

「図鑑でしう？」

「せこ……」

葵は葵の書いた小説を読んで感じた事を葵に投げかけると葵はつむき合へ返事をする。

「なら、葵ちゃんも変わらないこと、葵ちゃんの書く女の子達は向かって行っているよ。葵ちゃんが引いていたやいなこと思つてだよな」

「…………やつですね」

「じい。何か友達として見てること覚えたかな？」

「は、せこ。あつがじいじやれこめす。ヒ藤れ……………？」

葵は葵に頭を下げるとき葵の眞葉を止めると、

「葵ちゃん、ヒ藤をひいて呼ぶの禁止。ボクも今から葵ひいて呼ぶから、ボクの事は葵ひいて呼んでよ」

「あ、葵」

「せこ、呼んで」

「うふ。良く出来ました」

愛子は葵に自分の名前を呼ばせると笑顔を見せる。

第6・8問（後書き）

どうも、作者です。

秀吉の告白に葵はオーバーヒート？偶然居合わせた愛子は大変だったでしょ。う。（苦笑）

瑞希や美波と違つて自分の考えを押し付けない愛子って、バカテスじゃ、常識人だと思います。

変わりたい自分はすでに葵の作品にいましたが、愛子の言葉に葵は勇気を出して踏み出せるのでしょうか？

第69問（前書き）

連続投稿です。

第69問

「……」

「……本宮、お前は何がしたいんだ？」

「ひやうー?」

葵は理音に話があったのか、理音の家の玄関の前でインターホンを鳴らそつか悩んでいると葵の背後から、理音の声が聞こえ、葵はびくっと体を震わせる。

「……何かあつたか?」

「い、いえ」

「まあ、立ち話も何だしな。中に入れ」

葵が振り返ると右手に買い物袋を持った理音と理音の後ろに隠れている玲生が立つており、理音は葵が訪ねてきた理由に心当たりはないよつて首を傾げながらも家の鍵を開けて葵に家に入るよう言いつつに言い、

「お、お邪魔します」

葵は遠慮がちに家に上がり、居間のソファーに座ると、

「どうした? 珍しい物でもあつたか?」

「い、いえ、私の子の家に上がるのが久しぶりなので

「だらうな。俺が留学してからはアキの家にも行つてなかつただろうしな」

理音は落ち着かない様子の葵の前にオレンジジュースを置き、自分は葵の前に腰掛ける。

「は、はい」

「それで、何かあつたか?」

葵は緊張しているようで理音から出されたオレンジジュースに口をつけると理音は葵が訪ねてきた理由を聞く。

「あ、あの……私、木下くんから、告白されたんですね」

「そうか。それで」

「……」

葵は理音が何か反応してくれる事を少し期待しながらも秀吉に告白された事を報告するが、理音の顔が嫉妬で歪む事があるわけがない、葵は肩を落とす。

「それだけか?」

「あ、あの……私はビックリしたら良こと思います?」

「……本宮、それを俺に聞くのは筋違ひじゃないか?」

理音は葵にそれだけかと聞くと葵は理音に何か言つて欲しそうな表情をするが、理音はそんな葵の様子にため息を吐くと、

「答えは自分で探すんだ。俺は男として何も言ひてやる事はないぞ」

「…………そりですよね」

「ただ、『友達や仲間』としてはない、かけてやる薙葉くらこはある」

葵に抱えたままの想いを吐き出せりふとする。

「…………前田くん、それって」

「なんだ？ 俺があ前のガキの頃から気持ちに気がついてなかつた
とでも思つていたか？」

「……………………前田くんなら、気がついててもおかしくないです
よね」

理音の言葉に葵はすでに自分の理音に向けた想いがバレている事に
気づいて顔を伏せると、

「…………前田くんは私の初恋です。最初は怖かったけど、こんな私も
優しくて、前田くんのそばに居れば私は変われるんじゃないかな？
って思つてしましました。でも、前田くんはすぐに外国に行つてしまつ
て、私の時間は止まつたつて思つてました」

「…………」

葵はずつと胸に秘めていた想いを話し出し、理音は何も言わずに葵

の言葉を聞いている。

「……離れている時間が有つて、前田くんに再会した時、私はまた、昔、思い描いた自分になれるかな？って思いました。だけど、結局、私は自分では何もしないで立ち止まつたままだつたんです……前田くんや吉井くんが一人だと思い込んでいた私の手を引っ張つてくれようとしているのに自分はその手をつかむ事から逃げてたんですね」

「……そうだな」

葵はよほど覚悟を決めていたようであつすぐりに理音を見ると理音は彼女から視線を逸らす事なく頷くと、

「そんなイヤな女の子でも、前田くんや吉井くん、木下くんは私に手を伸ばしてくれました。だから、変わりたいんです。あの日、あなたに言えなかつた事を言う事で……あなたのなかに木下さんがいる事もわかつてます。だけど聞いて欲しいんです。前田くん、ずっと、あなたが好きでした」

理音に向けて過去に言えなかつた想いを打ち明ける。

第69問（後書き）

いつも、作者です。

葵は先に進むために理音に告白をしました。

理音はそんな葵に何を語ったのでしょうか？

そして、逃げ出した秀吉は？^{タレ}（爆笑）

第70問（前書き）

3連続投稿。

第70問

「……悪いな。俺は優子が大切だから、お前の気持ちには答えられない」

「……はい」

理音は葵の告白に優子本人にも言つてはいない自分の想いを話すと葵は理解していたはずだが、自分の初恋が終わりを告げた事に肩を落とすと、

「……お兄ちゃん、お姉ちゃんを泣かせたらダメです」

「違うよ。怜生くん、前田くんは悪くないよ。無理を言つたのは私なの」

話の内容は理解していないようで落ち込む葵を見て怜生は理音を怒るようになつたのが葵は理音と怜生の優しさが嬉しかったようで怜生を抱きしめてぎこちない笑顔で笑つ。

「……お姉ちゃん? 大丈夫ですか?」

「大丈夫……とは言えないけど、お姉ちゃんが望んだ事だから、自分の弱さを前田くんのせいにしないためにね。怜生くんももう少ししたら、わかるから、お兄ちゃんを責めちゃダメだよ」

「……わかりました」

怜生は葵の表情に心配そうに彼女の顔を見上げると葵は怜生を諭す

よつて言つと怜生は大きく頷き、

「……それで、前に進めそうか？」

「そうですね。少しだけ、時間はかかると思いますけど、前に進めると思います。立ち止まつても、『友達』の前田くんが背中を押してくれるから、吉井くんや木下くんが手を伸ばしてくれるから」

「そうか……」

理音は彼なりに罪悪感があるよつて少し遠慮がちに言つと葵は大丈夫だと言い、理音はその言葉に頷くと、

「なら、『友達』の俺としての意見だ。秀吉はお前の事が本当に好きだぞ。俺もあいつと会つてあまり口は長くはないが、女の事で素で慌てるあいつは見た事がない。演劇部だから割とポーカーフェイスは得意なはずなのにな。まあ、性別が秀吉だからかも知れないし、ヘタレな部分があるから、頼りなく見える事もあるけどな。あいつのお前への想いは本物だ」

「……はい。私もそう思います。そういうやないとあんなにドキドキしないと思いますから」

理音は葵と秀吉両方の友達として葵にアドバイスをすると葵は頷き、

「後は、1人で考えて見ます」

「ああ……本宮、頑張れよ」

「はい」

理音に頭を下げるときいと玄関に歩き出すが、

「ふざやーー？」

足を滑らせたよいで居間の外からは大きな音が響く。

「……怜生、本宮を送つてくるから、準備しろ

「……はー」

理音はその面に慌てる事なく立ち上ると怜生に葵を送りに行く準備をするように言い、自分は救急箱を持って居間を出て行く。

第70問（後書き）

いつも、作者です。

葵の告白にしっかりと自分の想いを打ち明けた理音。

皆さんの西にばざつ映つたでしょ？

作者は男なので葵の告白は願望であり、女性から見れば有り得ないと思われるかもせんが、葵を書こうと決めるにあたり、ここだけはゆずつてはいけないシーンだとも考えています。

前を向き、変わりたいと思つた葵と逃げ出した秀吉？

このままだと、秀吉は尻に敷かれる気がしてなりません。（苦笑）

第7-1問

優子は帰ってきた秀吉を見て、ある程度は葵と何かあったと気づいたようで、秀吉に葵との事を聞くと秀吉は葵に告白したもの返事から逃げ出してきたと言ふ。

「……それで、逃げ出したの？　わかつてたゞ、秀吉、あんた、
ヘタレね」

「うぬれこのじやー？　ワシだつて好きで逃げてきたわけじやー！？
あ、姉上、ワシの腕はそれらには曲がらぬのじやー？　すまぬの
じやー？　ワシが悪かったのじやー？」

優子は秀吉の情けなさにため息を吐くと秀吉は何か反論しようとす
るが、優子得意の関節技をかけられ、優子に泣きながら謝る。

「当たり前よ。あたしが悪いわけないでしょ」

「うう。自分から聞いておいて理不尽なのじや」

優子は謝る秀吉を放すと自分は悪くないと言こ切り、秀吉は納得が
できないとため息を吐く。

「まあ、それでも、告白してきたんだから、あんたとしあや、上出来
よね」

「姉上、本当にうつ思つかの」

優子は逃げ出したとは言え、今まで見た事のない秀吉の行動に苦笑

いを浮かべると秀吉は嬉しそうに聞く返す。

「だからと云つて、まだまだよ。男なら、振られるにしてもキチンと返事くれこ聞いてきなさいよーー！」

「姉上、待つのじやーー。なぜ、姉上にはワシが振られる選択しかないのじやーー？」

優子は秀吉に調子にのるなと云つたげに秀吉の腕をつかむと秀吉は納得でわざと声を上げると、

「決まつてゐるでしょーー。女装して喜んでいる変態を女の子が好きになると思つ? ……自分より、男の子に告白されるのが彼氏で彼女の立場があると思つ? まつたく、今は彼氏がいるから、問題ないけど、姉より、男の子から告白される弟つてなんなのよ?」

「姉上、待つのじやーー。今は清涼祭が近いゆえ多いだけなのじやーー? だいたい、それはワシのせこではないのじやーー?」

優子は未だに男子生徒が秀吉に告白するのが許せないよつて秀吉の腕を締め上げると秀吉は自分のせこではないこと叫ぶが、

「あんた、男だ。男だ。つて言つながら、男子生徒から告白されない男になりなさいよね」

「う、理不尽なのじやーー?」

優子は秀吉の言葉にせりふに熱くなり、近隣には秀吉の悲鳴が響く。

第72問

(……顔を会わせづりこのはじゅ)

秀吉はいつもは葵を迎えてBクラスへ行くのだが、グダグダな告白のせいか足が思つよつて進まないようである。

「秀吉、お前は何をしてこるんだ？」

「理音、いや、何とこりうかのう」

「本當にグダグダな告白をしたから、迎えに行きづりこのはわかるがさつせと行け」

理音はそんな秀吉の様子に声をかけるが秀吉ははつきりしないため、理音は深いため息を吐く。

「な、な、なぜ、それを知つておるのじや！？ 姉上じやな！？ ひどこのじや、誰にも言わぬと言つておったの！」

「……秀吉、あんた、あたしを疑つてるわけ？」

「優子、落ち着きなよ」

秀吉は自分が葵に告白した事を知つてているのは姉の優子だけだと思つてゐるよつて理音にバレているのが恥ずかしいのか顔を真つ赤にして優子を責めるよつて言つた時、優子と愛子が教室に顔を出し、優子は秀吉の言葉を聞いて額に青筋を浮かべながら秀吉の肩をつかみ、愛子は優子と秀吉の様子に苦笑いを浮かべる。

「秀吉、勘違いするな。俺は工藤から聞いた」

「うん。ボクが葵から弟くんから告白されたって相談受けたからね
」

理音は葵本人から聞いたとは言わずに愛子に聞いたと言つと愛子は本当に理音に連絡していたようだ苦笑いを浮かべたまま、秀吉に向うと、

「な、なぜなのじゃー!?」

「……秀吉、そんな事を言つよつ先にあたしへの謝罪はないわけ?」

「あ、姉上、す、すまぬのじゃー? ワシが悪かつたのじゃー!」

「秀吉、知つてる? 謝つてすむなら警察はいらないのよ」

秀吉は愛子から聞かされた言葉に声を上げるが優子は先に自分への謝罪が先だと言い、秀吉に関節技をかけ始め、教室には秀吉の叫び声が響く。

「……ねえ。前田くん、優子を止めなくて良いの?」

「別に良いだろ。それより、昨日も聞いたが、工藤が本宮と仲良くなつたと言つのは意外だな」

「あれ? それって、ボクじゃ、不満つて事?」

理音は葵と愛子が仲良くなつた事に首を傾げると愛子は少し不満げ

な顔をする。

「おかしな意味じゃない。先に瑞希と仲が良くなると思つてたからな。お前とじや……乙女チックな少女マ……」

「ストップー？ 前田くん、おかしな事を言わないで……」

理音はおかしな意味ではないこと言つと愛子の共通点を探しだし、口に出でつとすると愛子は慌てて理音の口を塞ぎ、

「なるほど、結構な共通点だったな」

「……前田くん」

「キヤラ作りも大変だな」

理音は表情を変える事なく愛子に言つた愛子は苦笑いを浮かべる。

第73問

「……おー。本宮、掃除の邪魔だ」

「は、はーー? 『、ごめんなさい。根本代表! ? ……』

恭一は授業が終わり、いつもなら秀吉や他のクラスの演劇部が迎えにくるはずの葵が教室に残っているのも見て邪魔だと言つと葵は慌てて席を立とうとするが慌てたため、足を机にぶつけで涙目になる。

「……お前は何がやりたいんだ?」

「『、『めんなさい。お掃除の邪魔になつて……あれ? 根本代表だけですか?』」

恭一は葵の様子にため息を吐き、葵は慌てて恭一に頭を下げるが何か違和感があつたようで恐る恐る頭を上げると教室の掃除は恭一人である。

「ああ」

「どうしてですか?」

恭一は葵の言葉に不機嫌そうに頷くと葵は代表の恭一が一人で掃除をしている意味がわからずキヨトンとした表情で聞き返すと、

「あ? 別にお前に関係ないだろ」

「す、すいません。で、出すきたことを! ?」

恭一は睨みを効かせて言つと葵はいじめられっこ属性を全開にして恭一に何度も頭を下げた後、掃除用具を持つてくれる。

「……本宮、お前は何がしたいんだ？」

「えーと、私に掃除を代わるって事じゃないんですか？」

恭一は葵の様子に頭を押さえてため息を吐くと葵は少し怯えた様子で答える。

「誰もそんな事を言つてないだろ。お前は部活があるんだ。さっさと行け」

「で、でも、一人で掃除は大変です」

恭一は葵の様子に調子が狂つと言いたげに葵を追い払つよつに手を振るが葵は出て行く事も出来ないようであり、

「……勝手にしろ」

恭一は葵に関わるのが面倒になつてきただよで掃除を再開させると葵は恭一から少し距離を取りながらも掃除を手伝つてしまへした時、

『あれ？ 葵、まだいたの？ 部活いくよ』

「そ、掃除があるので」

「本宮、もう良いから行け」

他のクラスの演劇部員がBクラスの教室に顔を出し、葵を呼ぶと葵は掃除を続けようとするが、恭一はさっさと行けと葵を追い払うように伸び、手を振る。

「で、でも」

「お前は掃除当番でもないだろ……もつ良い。助かった

葵は一人で掃除をするのが大変だといつが恭一は葵に背を向けながら、葵に礼を言つて、

「はい……」

『葵、先に行つてるよ。根本くんに襲われないようにね。葵には木下くんがいるんだから、根本くんもね』

葵は何か言いたげに返事をするとその姿に演劇部員は何かを感じたよつて葵に先に行くと言つて歩き出す。

「あ、あの。根本代表。根本代表は確かに卑怯な事をしたんだと思いますけど、代表としては間違つてないと私は思います」

「……本音、お前は何を言いたいんだ？」

「え、えーと、な、なんて言つたら良いか。わ、わからないんですけど」

葵は理音達と関わりだし、自分と恭一にある変化を感じているのか、恭一に試合戦争での事は間違つてないといつと恭一は意味がわからないと眉間にシワを寄せると葵はビクッと体を震わせて恭一

から距離を取る。

「……本宮、お前、バカだろ。おかしな勘違いしてないで、せつと
と行け。邪魔だ」

「は、はい」

恭一はもう一度、葵に部活に行けと言つと葵は恭一に頭を深く下げ
た後、カバンを持って距離を出で行き、

「……つたく、本宮と云ふ、前田と云ふ。何なんだよ

恭一は不機嫌そうに舌打ちをするが少しだけ口元が優しく緩む。

第7・3問（後書き）

どうも、作者です。

秀吉が煮え切らないなか、葵は葵で部活から若干逃げている。

……進まないな。この2人。（苦笑）

葵と恭一の関係って、何なんでしょうか？

理音とつながったからの恭一の変化。

4巻はどうなるんだ？と改めて思います。

まあ、書き始めた時は書くつもりがなかつたからなあ。（苦笑）

第74問

『それじゃあ、今日の練習は終わるよ。木下、本宮、明日も今日みたいに気の抜けたような事をしたら、清涼祭まで出禁にするからね！』

「う、うむ。氣をつけるのじゃ」

「は、はい。申し訳ありません」

演劇部の練習の終わりに先輩部員は秀吉と葵の不調に気づいていたようすで2人に向かい言つと、2人は申し訳なさそうに先輩部員に頭を下げるが、

『わかつてゐなら、さつさと切り替える。木下、あなたは役者なの。あなたがおかしな演技をしてると見る人も楽しめないし、舞台もぐちゃぐちゃになる。それくらいは理解しなさい。本宮、あなたもだよ。脚本は役者に取つて心臓なの。そして脚本を書いてるあなたの言葉は血液、血液が止まつたら、舞台は止まるわよ。それくらい、理解しなさい』

先輩部員は秀吉と葵を叱咤すると、帰る準備を始め出す。

「お互い、怒られてしまつたのう」

「そうですね」

秀吉は葵から視線を逸らしながら苦笑いを浮かべて言つと葵も秀吉から視線を逸らしたまま頷き、

『や、それでは帰るとするかのう』

「は、はいー?」

秀吉は断られないかと心配しながらも葵に声をかけると葵は声を裏返して返事をする。

『あれは進展が有つたと見ていいか?』

『まだよ。前田くんと工藤さんに聞いたんだけど、木下くんは勢いで告白したけど、その場から逃げ出したみたいよ』

『……なるほど、それなら、今日は告白の返事が聞けるわけだな』

『まつたく、昨日、後をつけられなかつた事が悔やまれるわ』

葵と秀吉の様子に演劇部員は集まり、こそり話を始め出し、

『……あんた達もこりないね』

先輩部員はその様子にため息を吐くと、

『あの2人も今日は全然だつたけど、あんた達もだよ。2人の事が気になるのもわかるけど、仲間なり見守つてあげなさい』

演劇部員達に注意をするが、

『わかつてますよ。私達はちゃんと見守るつもりですーー!』

『 もう一つです。ただ、2人をからかおうなんて思つてませんーー。』

『 もう言つながら、デジカメや録音用のレコーダーは置いていきなさい。』

演劇部員達は今日も葵と秀吉を履行するつもりのようで先輩部員はため息を吐く。

『 何を言つてるんですかーー。本物の告白とその返事、私達、演劇部員には素晴らしい教材ですよ。2人ならわかつてくれるはずですーー。』

『 わかるわけないわよ。あんた達、おふざけが過ぎるから居残り、舞台の雑巾掛けをしなさい。当然、あたしが監督をするわ』

先輩部員は部員達の悪のりに頭を押されると雑巾掛けを言い渡す。

第74問（後書き）

いつも、作者です。

作者は演劇部員がお気に入りです。（爆笑）

最初はここまでキャラが立つてなかつたんだけじゃなあ。（苦笑）

まあ、葵と秀吉を応援してくれてるとは思いますがベクトルは理音
や愛子とは別方向です。

2人で帰路についた葵と秀吉。

皆田の返事は？（悪笑）

最終問題

「 「 …… 」 」

葵と秀吉は2人で並んで歩いているが、お互に何を話して良いのか
わからなつようで沈黙が続いている。

「 も、本宮、あの」

「 は、はいー? 」

秀吉は沈黙に耐えきれなくなつたよつて葵に声をかけないと葵は声を
裏返すが、

「 「 …… 」 」

そこから、先が続かず、沈黙が流れた時、

「 …… お前には何がしたいんだ? 」

「 理音ー? 」

「 前田くんー? 」

2人の姿を見かけた理音がため息を吐きながらシッ ハハハ 理音の登
場に葵と秀吉は驚きの声をあげる。

「 り、理音ー? なぜ、お主がいるのじやー? 」

「なぜ？」と言われてもな。普通に買ひ物の途中だ

「…………」
「おひでやせ」

秀吉は理音の登場に慌てて声をあげるが理音は無表情なまま右手に持つたレジ袋を見せると玲生が理音の後ろから顔を出して頭を下げる。

「秀吉、本町、こかづへならこやかへひまつあつしが。今のお前は正直つうとうして」

「こわなつ、何を言ひのじやーー。」

「や、やうでや」

理音ははつれりとしない二人に向かい言ひと秀吉と葵は顔を真つ赤にして声をあげるが、

「「あー……」「…………」

お互にが回じ反応をしたためか、顔を見合せた後に恥ずかしくなつたよつて視線を逸らす。

「…………俺と玲生は帰るからな」

「…………やめひなひ」

理音は2人の反応にため息を吐くと玲生の手を止め、歩き出しつ

「「…………」「…………」

2人の間には再び、沈黙が訪れようとするが、

「も、本富、さ、昨日のく、返事を聞かせて欲しいのじや」

「……あの。木下くん、本当に私で良いんですか？ 私、暗いし、かわいくもないし、気の利いた話だつてできないですよ」

秀吉は意を決したようで顔を真っ赤にしたまま、葵に告白の返事を聞かせて欲しいと叫ぶと葵は不安そうな表情で聞き返す。

「な、何を言ひておるのじや…… 本富が良いのじや……」

「あ、木下くん……」

秀吉は顔を真っ赤にしたまま、叫ぶよつと叫ぶよつと葵は耳まで真っ赤にし、秀吉から視線を逸らすと、

「あ、あの。映画何ですけど、い、今からでも良いですか？」

「……そ、それはもううんざりや」

「そ、それではお願こしまや」

葵は秀吉に返事の代わりなのか、秀吉からの映画テー^トトを受けると言つと秀吉は一瞬、何があつたかわからなかつたようだが、すぐに理解したようで慌てて頷き、葵は秀吉の返事に恥ずかしそうに秀吉の顔を見上げる。

「う、うむ。それでは行くのじや」

「は、はい」

秀吉は葵の顔を見て嬉しそうに笑うと葵の手を握り、2人で映画館へ向かい歩き始めると、

「あ、あの。木下くん」

「手、手を握るのはまずかつたかのうへ。」

葵が秀吉を呼び、秀吉は失敗したかと思つたのか慌てて手を放すが、「ち、違います！？」あ、あの。わ、忘れてしまつとなんなので、声を聞きたくなつた時の……」

「や、そりやな。しかし、困ったのじや、ワシは携帯を持つてないのじや」

葵は手の事ではなく、秀吉に携帯電話の番号を聞くが、秀吉は今までも必要ないと思つていた携帯電話を持つていなし事を後悔するよつに言つ。

「や、それなら、今度のお休みにふ、2人で見に行きませんか？」

「へ、ひむ。よろしく頼むのじや」

葵は勇氣を振り絞つて秀吉に向って「トート」と誘うと、

「や、それでは、行くのじや。あ、あまり、遅くなると本宮の親御さんにも迷惑をかけてしまうじのう」

「は、はい」

秀吉は大きく頷き、再度、葵の手を握り、2人で映画館に向かい歩き出す。

最終問題（後書き）

完結までお付き合つていただきありがとうございました。

なんか、ハンパな終わり方みたいな気がしますが監さんにはどう映つたでしょう？

前に進むために勇気を振り絞つた葵と何となく流れられている秀吉。

この2人はどう進んで行くんでしょうか？

宣伝？

本編である『サドで邪悪な召喚獣』の清涼祭編が終わつたら、葵も本編に合流させようと考へています。
ですから、この煮え切らない2人の行く末は本編でお楽しみください。

まあ、後は活動報告に後日談を書くかもしれません。（悪笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7741o/>

本と勇気と演劇部

2011年5月24日00時53分発行